

蒸溜水を加へて

二〇オンス

第一液一オンス第二液二オンスを混和して使用すべし。

パイロカテキン現像液

第一法

第一液

パイロカテキン

一七五ゲレン

亞硫酸曹達

一 $\frac{1}{2}$ オンス

水

二〇オンス

第二液

炭酸加里

二 $\frac{1}{2}$ オンス

水

二〇オンス

兩液等量を混和して使用す。

第二法

亞硫酸曹達

五オンス

水

二〇オンス

苛性曹達

二六〇—三〇〇ゲレン

パイロカテキン

四〇〇ゲレン

薬品は上記の順序に溶解し、善く密栓し原液として保存すべし、使用の際には水を以て二十倍に稀薄して使用すべし。

ロヂナル現像液

ロヂナルはバラミドヘノルを濃厚にしたる液にして其用法は左の如し。

普通原板の現像にはロヂナル一オンス、水二十五オンスを用ふ、露出過度の原板には

ロヂナル

一オンス

臭素加里

一五〇ゲレン

水

一オンス

露出不足の場合にはロヂナル一オンス、水三十乃至八十オンスを使用す。

定時現像法

現像液中に原板を入れたる時より晝影の現出し初めたる迄の時間に其現像薬の系数を乗じたるものを以て其の現像時間とす。

没食曹達現像液(臭素加里を加へざるもの)

一オンス中に於ける没食酸の量

没食曹達現像液(臭素加里を加へたるもの)

一オンス中に於ける没食酸の量

一オンス中に於ける臭素加里の量	1/4	1/2	3/4	1	2
系数	9	5	4 1/2	4	3 1/4

一オンス中に於ける臭素加里の量	1	2	3	4	8
系数	18	12	10	8	6 1/2

パイロ、アセトンは上表の約二倍とす。

現 像 薬

系 数

アデユロル	5
アミドル(一オンス中に二ダレン)	18
チアミドヘノル	60
チオゲン	12
エチノル	20
アイコノゲン	9
グリシン(炭酸曹達)	8
グリシン(炭酸加里)	12
ハイドロキノソ	5
イルホル	4 1/4
イモゲン、サルフワイト	6

カチン	10
コダック現像粉薬	18
メトール	30
メトール、ハイドロキノ	14
オートル	10
バイロカテキン	10
キイノメツト	30
ロチナル	40

注意—系数大なる現像液(メトール、ロチナルの如き)は現像時間永さを以て軟調の原板を得べく又た系数小なる現像液(ハイドロキノ、バイロ曹達の如き)は現像時間小なるを以て硬調の原板を得べし

堅現像液

堅現像にはグリシン最も好適す、ヒューブル氏の示せる處法は左の如し。
標準現像液

グリシン原液(ヒューブル氏法) 一オンス

水 八〇乃至九〇オンス

臭素加里一割溶液 八〇ミニム

適度に露出したる原板は十五分乃至二十分時に畫像現出し、數時間にして充分なる密度を得べし。

露出不足の原板には

グリシン原液(ヒューブル氏法) 一オンス

苛性曹達一割溶液 一オンス

水 五〇オンス

華氏七十五度に温めて現像すべし。
露出過度の原板には

グリシン原液
臭素加里一割溶液
水

一オンス
一オンス
二五オンス

現像定着混合液

實用上使用すること可ならざれども、次液は最良なるものなりといふ。

甲液
カチン
亞硫酸曹達
水を加へて

一五〇ゲレン
三オンス
二〇オンス

乙液

苛性曹達
水を加へて

一六〇ゲレン
二〇オンス

丙液

ハイポー
水を加へて

一オンス
二オンス

甲液百六十ミニム、乙液二十四ミニム、丙液二十ミニムを執り、之れに水を加へて一オンスとすべし

酸性アミドル現像液

バラニー氏が透明畫板トランスパレシーの現像に使用せし處法に改善を加へたるものなれば、乾板の現像に用ゐらるべし。

アミドル
無水亞硫酸曹達

六グラム
一二グラム

臭素加里一割溶液

三〇立方センチメートル

重亜硫酸曹達

三〇立方センチメートル

水

一〇〇〇立方センチメートル

本液は特に瞬間撮影の原板に適すれども、場合によりては臭素加里を五分の一量に減ずるを得、而して定時撮影特に室内又は森林中の景の如き強き陰影部を有するものにありては次の如くに調製するを可とす、先づ初め重亜硫酸溶液の原液を調製し置く、即ち無水亜硫酸曹達二十瓦を水百廿五立方センチメートルを以て溶解し、之れに重亜硫酸曹達液七十五立方センチメートルを加ふ、而して定時撮影の原板現像には

アミドル

三一六グラム

重亜硫酸原液

四八立方センチ

臭素アムモニウム一割液

六〇立方センチ

水

一〇〇〇立方センチ

原板を此現像液に入れて四分乃至五分間に畫影現出せざれば重亜硫酸原液十二立方

センチを加ふべく、尙ほ必要に應じて九十立方センチ迄加ふべし。戶外に於ける直射光線の人像、硬調の室内人像又は森林の景の如き非常にコントラストに富むものには次の如き液を以て現像すべし。

アミドル

三グラム

重亜硫酸原液

六〇立方センチ

臭素アムモニウム一割液

一二〇滴

水

一〇〇〇立方センチ

臭素アムモニウム量の量は露出に随ひて百廿滴まで増加するを得べく、アミドルと臭素との量は随意に加減するを得べし。

抑 掣 劑

臭素加里一割液は一般に使用せらるゝ抑掣劑なり

枸橼酸アムモニウムはデターの現出を防ぐことなく善くカブリを防ぎて原板に佳

良の密度を與ふるものなり、パイロ、アムモニア現像液に加ふる分量は一オンスに對して六乃至十ゲレンなり。
重炭酸曹達は抑製作用を爲す特にアミドル現像液に有效なり。

酸性定着液

ハイポー液(1:3)

五〇オンス

之れに左の混和液を加ふべし。

酒石酸(1:2)

一七オンス

亞硫酸曹達(1:4)

三三オンス

明礬ハイポー定着液

明礬飽和溶液

二〇オンス

亞硫酸曹達飽和液

四乃至七オンス

ハイポー液(1:3)

二〇乃至二八オンス

此定着液一ポイントに異性重亞硫酸加里半オンスを加ふれば佳良の酸性定着液を得べし。

クローム明礬ハイポー定着液

亞硫酸曹達

二オンス

水

六オンス

本液中へ

強硫酸

一ドラム

水

二オンス

を加へ、其混和液を左液中へ混和す

ハイポー

一六オンス

水

四八オンス

而して最後に次液を加ふべし。

クロロム明礬

水

一オンス

八オンス

ハイポー驅除劑

第一法

過酸化水素

水

一ドラム

五オンス

原板を善く水洗したる後本液中に一、二分間浸漬したる後再び水洗すべし。
過酸化水素を得られざる場合には、左液を以て其代用となすことを得べし。

過酸化バリウム

氷狀醋酸

水

一オンス

一オンス

四〇オンス

過酸化バリウムを粉狀にして徐々に酸液中に加へ善く振盪して溶解すべし。
本液中に原板を漬すときはハイポーを全く驅除することを得べし。

第三法

過硫酸アムモニウム

炭酸曹達

水

二七ゲレン

五ゲレン

一オンス

第三法

過炭酸加里

水

二七ゲレン

一オンス

第四法

原板を水洗したる後多量の過滿俺酸加里を含有する水中に移すときは、液は淡紅色^{ピンク}を帯ふるに至るべし、此に於いて更らに淡き過滿俺酸加里液に入れて、其液の變色せざる迄浸漬すべし。

原板の迅速乾燥法

二〇〇

第一法

定着後水洗したる原板をホルマリン五十倍液中に十分間浸漬し、温湯を五六回原板にそそぎ熱を加へて乾燥すべし。

此法を施したる爲めに原板膜に生ずる突起はアルコールを潤めせるナメシ皮の一片を以て壓して除去すべし。

第二法

ハイポー驅除法を施したる原板上に麻布を載せ、其上よりローラーを以てスクキーデして水分を除去したる後、温かき場處に置けば數分間に乾燥すべし。

第三法

定着後水洗したる原板をメチール、アルコール中に入れて洗ひ、空氣の流通宜き處にて乾燥すべし。

不純のアルコールを用ふるときは膜面に白色の浮渣附着するを以て注意せざる可らず

原板補力液

第一 水銀補力法

原板を左の鹽化水銀飽和液にて漂白すべし

鹽化水銀(昇汞)

一オンス

温湯

一六オンス

本液を冷却せしめ、白色羽毛狀結晶物を删除して左藥を加ふ

鹽酸

三〇ミニム

漂白したる原板を善く水洗したる後、左記の甲、乙、丙三液中の一つを選びて原板を黒色に戻すべし。

甲液

アムモニア(〇)、八八〇)

二〇滴

二〇一

水

一オンス

1101

本液は充分に原板を補力し、善良なる黒色を與ふ。

乙液

亞硫酸曹達一割溶液

枸橼酸を加へて少しく酸性にす。

本液は原板を少しく補力す。

丙液

沒食曹達、沒食アムモニア、ハイドロキノロン、又は鞣酸鐵の如きアルカリ性現

像液

本液は乙液の約倍量の補力を爲すべし。

第二一 モシクホーヴン氏法

第一液

臭素加里

一〇ゲレン

鹽化水銀(昇汞)

一〇ゲレン

水

一オンス

第二液

青酸加里

一〇ゲレン

硝酸銀

一〇ゲレン

水

一オンス

原板の白色を呈するまで第一液中に入れ、之を水洗したる後第二液に移すべし。補力過ぎたる場合には次亞硫酸曹達の淡き液を以て減力することを得べし。

第二二 沃化水銀法

水

二〇オンス

亞硫酸曹達

四オンス

沃化水銀

九〇ゲレン

1103

初め亞硫酸曹達を溶解して調合すべし、定着液より直ちに原板を本液中に浸して補力したる後、數分間水中に浸漬し然る後ハイポー液（一オンス液中にハイポー十ゲレン）中に數秒間入るべし。
現像液又は硫化曹達五分溶液を以て黒色に戻すべし。沃化水銀の代りに左液を使用するを得。

第二鹽化水銀

- 水 五〇ゲレン
- 一〇オンス

之れに沃化加里一割溶液を初め生成せる沈澱物が再び溶解するまで加ふべし、其清澄するを待ちて左液を加ふ。

硫化曹達

- 水を加へて 四オンス
- 二〇オンス

第四 銀補方法 (其一)

- 硝酸銀 一二〇ゲレン
- 水 二オンス

之れに左液を加ふ

- 硫酸アムモニウム 二四〇ゲレン
- 水 三オンス

此混和液は數週間保存せられ得れども使用の際調製するを可とす、而して補力液は

前記の混和液 $\frac{1}{2}$ オンス

ハイポー液 (1:4) 白色沈澱物の溶解する迄

パイロ一割溶液 三〇ミニム

アムモニア一割溶液 四〇—六〇ミニム

原板は明礬或はフォルマリンを以て硬ためて補力すべし、原板を充分に補力せば一、

二分間定着して水洗すべし。

第五 銀補力法 (其二)

第一液

焦性没食酸

一五ゲレン

枸橼酸

五—一〇ゲレン

水

一〇オンス

第二液

硝酸銀

一〇ゲレン

水を加へて

一オンス

第一液一オンスを原板に一二回そそぎ、第二液十五滴を加へて再び原板にそそげば、補力作用起るが故に、充分の密度を得る迄浸漬すべし。補力したる原板は水中に浸したる後定着して再び水洗すべし。

第三編 寫眞術用處法

第六 クロミユウム補力液

甲液

重クローム酸加里

五ゲレン

鹽酸(比重一、一六〇)

一ミニム

水

一オンス

乙液

重クローム酸加里

一〇ゲレン

鹽酸

五ミニム

水

一オンス

丙液

重タローム酸加里

一〇ゲレン

鹽酸

二〇ミニム

水

一オンス

二〇八

甲、乙、丙液其内の一つを選びて原板を漂白し次に黄色斑點の除去せらるゝまで水洗したる後、アミドルを以て現像すべし。

甲液は水銀アムモニア補力液と同様に、乙液は水銀及稀酸鐵と同様に、丙液は水銀及亞硫液曹達の如くに補力作用を爲す。

初回の補力にて充分の密度を得られざる場合には數回繰廻へすことを得べし。

第七 硫酸銅補力法

第一液

硫酸銅

一〇〇ゲレン

水

一オンス

第二液

臭素加里

一〇〇ゲレン

水を加へて

一オンス

第一液及び第二液は共に温湯を以て作り、兩液を混和して冷却す。此混和液を以て原板を漂白して一二分間水洗す、次に左液を以て原板を黒色に戻す。

硝酸銀

四五ゲレン

蒸溜水

一オンス

若し多分の密度を得んとせば銀液に浸したる後善く水洗し、更に通常の現像液を以て現像すべし。

若し硬調ならば弱きハイポー液(一オンス中にハイポー十ゲレン)又は青酸加里液(一オンス中に二ゲレン)中に入るべし。

第八 硝酸鉛補力液

硝酸鉛

四〇〇ゲレン

赤色血滴鹽

六〇〇ゲレン

二〇九

醋酸
水を加へて

三ドラム
二〇オンス

二一〇

本液は暗所に貯ふれば永く保存せらるべし、本液を以て原板を漂白し、硝酸一割溶液を以て注意して洗滌したる後水洗す、而して左の甲又は乙液を以て黒色にす。

甲液

硫化曹達

一オンス

水

二〇オンス

乙液

重クローム酸加里

一オンス

アムモニア(八八〇)

半オンス

水

一〇オンス

此補力液は濃度の補力を爲すものなり。

第九 ウラニウム補力法

第一液

硝酸ウラニウム

一〇〇ゲレン

水

一〇オンス

第二液

赤色血滴鹽

一〇〇ゲレン

水

一〇オンス

第一液一オンス、第二液一オンス、醋酸二ドラムを以て補力液を調製す。

原板はハイボアの痕跡を充分に除去し、補力後も數回水洗して黄色斑點を驅除すべし
硫青酸アムモニウム十ゲレンを一オンスの水にて溶解したる液は原板に於ける黄色
斑點を驅除するを得べし。

二一一

原板減力法

二二三

第一 ファーマー氏減力液

第一液

赤色血鹵鹽

二〇ゲレン

水

一オンス

第二液

次亞硫酸曹達

一オンス

水

二〇オンス

第二液は清淨なるものを作り、之に原板を浸漬す、次に第一液數滴をメートルグラスに入れ之に原板を浸したるハイポー液を注加して兩液を混和す、此混和液中に原板を入れる、時は減力作用は漸次に開始せらる、其作用の進行を注視し適度に減力せられたれば、直ちに原板を取出して善く水洗すべし。

第二 ベリツキ氏減力液

稀酸鐵加里

一五〇ゲレン

亞硫酸曹達

一二五ゲレン

水

七オンス

溶解せしめて稀酸を加ふ即ち

稀酸

四〇—四五ゲレン

溶液が綠色を呈するまで振盪し、之れにハイポーを加ふ即ち

ハイポー

一³/₄オンス

稀酸鐵の代りに次の藥品を用ふるを得べし。

結晶鹽化鐵

一〇〇ゲレン

稀酸加里

一九〇ゲレン

減力液は斑點を生ぜず、暗處に貯ふれば永く保存することを得べし。

二二三

第三 過硫酸減力液

其一

過硫酸アムモニウム 一一—二〇ゲレン
水 一オンス

使用の都度新たに溶液を作るべし、本液二オンスに對して硫酸一滴を加ふれば作用確實なり、適度に減力せば原板を亞硫酸曹達五分溶液中に入るべし。

其二

過硫酸アムモニウム 四八〇ゲレン
亞硫酸曹達 九六ゲレン
硫酸 四八ミニム
水 一〇オンス

本液を水九を以て稀薄し一分溶液を作りて使用する。本液は善く保存せらるべし

第四 エダー氏減力液

青酸加里 二〇ゲレン
沃土加里 一〇ゲレン
昇汞 一〇ゲレン
水 一〇オンス

本液は減力作用緩和にして處理甚だ簡易なり。
初め昇汞を溶き、次に沃土、終りに青酸加里を加へて赤色の沈澱物を溶解すべし。

第五 重クローム酸減力液

重クローム酸加里 一〇〇ゲレン
硫酸 七ドラム
水 二〇オンス

第六 硫酸セリツク減力液

二二六

硫酸(比重一、九八)

二〇ミニム

水

二オンス

之を左液中に溶解す

硫酸セリツク

一オンス

之を水十オンスにて稀釋す

減力せんとする硬調の原板を本液中に浸漬し且つ又た其九倍溶液中に浸漬して減力す

第七 過滿俺酸加里減力液

過滿俺酸加里一割溶液

一ドラム

硫酸一割溶液

五ドラム

水

一〇オンス

本液の爲め褐色班點を生せば稀酸二部を含有する亞硫酸曹達一割溶液を以て除去するを得べし。

原板用ワニス

ホツトワニス

其一

サンダラツク

四オンス

アルコール

二八オンス

ラベンダー油

三オンス

本液は原板修整用として善良なるワニスなり。

其二

シードラツク

二オンス

サンダラツク

二オンス

二二七

ラベンダー油
カストール油
アルコール

其 三

白色硬性ワニス
精製酒精

其 四

シエラツク
マスチツク
テレメン油
サンダラツク
アルコール

其 五

半オンス
一オンス
四〇オンス

一五オンス
二〇—三〇オンス

$\frac{1}{4}$ オンス
 $\frac{1}{4}$ オンス
 $\frac{1}{4}$ オンス
 $\frac{1}{4}$ オンス
二〇オンス

サンダラツク
テレメン油
ラベンダー油
アルコール

其 六

サンダラツク
シード、ラツク
カストール油
ラベンダー油
アルコール

此ワニスは稍々暗色を帯ぶ

其 七

精製オランダ、シエラツク

八〇オンス
三六オンス
一〇オンス
五〇〇オンス

一オンス
 $\frac{1}{2}$ オンス
三ドラム
 $\frac{1}{2}$ ドラム
一八オンス

$\frac{1}{2}$ オンス

ラベンダー油(又はテレメン油)
メチール、アルコール

1/4オンス
二〇オンス

溶解する迄温かき室に置くべし、之れにチヨーク(白堊)の一匙量を加ふ、振盪して清澄液を作るべし、此ワニスは特にゼラチン原板に特效あり。

ユールドワニス

其 一

セルロイド
アミール、アセテート

一オンス
五〇オンス

此液は刷毛を以て原板に塗り、別に火を以て温むるを要せず。

其 二

ザンジバル、コパール
アムバー(琥珀)

六オンス
一オンス

エーテル

六〇オンス

アセトン

四〇オンス

クロロホルム

四オンス

其 三

シエラック二割溶液

二オンス

アムモニア(〇、八八〇)

三ドラム

メチール、アルコール

四オンス

フキルム用ワニス

其 一

シエラック

三オンス

炭酸曹達飽和溶液

二四オンス

其 二

硼砂

グリスリン

シエラック

水

上液を半時間熱し之れに

メチール、アルコール

を加へて濾過す、

其三

ダムマーゴム

ベンゾール

之を濾過して使用する、

三〇〇ゲレン

三〇〇ミニム

六〇〇ゲレン

二〇オンス

五オンス

五〇〇ゲレン

一〇オンス

修整用ワニス

レズン護膜

ダムマー護膜

マスチック護膜

ジュニパー油

テレメン油

二〇〇ゲレン

九〇ゲレン

二〇ゲレン

一ゲレン

二一四オンス

護膜は粉状になして油に加へ、而してワニス一吋の深さにて濃色の琥珀色を呈するまで純良のアスバルトを加ふべし。

マツトワニス

サンダラック

マスチックゴム

エーテル(〇、七二〇)

九〇ゲレン

二〇ゲレン

二オンス

上液を善く溶解せしめ、之れに

ベンゾール

7/10—1/2オンス

を加ふ。

此ワニスは冷却せる原板に塗布せざるべからず。

處理上綠色、黄色、又は褐色のワニスを要するときはマラチート、グリーン、オーラ
ンシア。アスパルトを用ゐて着色すべし。

原板膜を硬むる液

其 一

フホルマリン

一オンス

水

10—20オンス

其 二

明 礬

一オンス

水

20オンス

其 三

クローム明礬

一オンス

水

20オンス

原板清浄液

其 一

明 礬

2オンス

枸橼酸

1オンス

水

10オンス

定着後水洗して原板を本液中に浸漬すべし、

本液は稀酸鐵を以て現像したる原板に生ずる沈渣を驅除する效あり。

其 二

クロロム明礬

鹽酸

又は枸橼酸

水

半オンス

半オンス

一オンス

二〇オンス

其 三

チオカーバマイド

九〇ゲレン

枸橼酸

九〇ゲレン

水

二〇オンス

原板上の斑點驅除法

第一液

沃土加里

二〇〇ゲレン

水

一〇オンス

原板を第一液中に浸したる後水洗して第二液中に移すべし。

第二液

青化加里

三〇〇ゲレン

水

一〇オンス

本液中にて原板膜の斑點を綿にてこすりて除去すべし。

原板膜剝離液

其 一

メチール、アルコール

二五オンス

水

一オンス

グリスリン

一オンス

上液中に弗化水素酸六乃至三十液を加へて脱離液を調製す。

其 二

左液は作用強性ならざれども古き原板又は硬めたる原板に其效あり。

メチール、アルコール

一オンス

水

二オンス

弗化水素酸

六〇ミニム

上記の分量はアルコール及酸の性質によりて加減するを得べし。

其三

ストリツピング、ソリュエーション
左の脱離液はフィルム原板に好適するものなり。

苛性曹達

一〇ゲレン

フホルマリン

一〇ミニム

水

一オンス

セルロイド原板を膜が脱離せらるゝ有様を呈せば次液中に入るべし。

弗化水素酸

二五ミニム

グリソリン

二五ミニム

水

一オンス

而して原板膜を硝子又は他の物體に移すべし。

バックイング、ソリュエーション
乾板裏塗液

水

一〇オンス

護 謨

一オンス

バート、シーナ(繪具)

一オンス

乾板裏面へ本液を刷毛にて塗布すべし。

陽 畫 法

雞 卵 紙

一 感光銀液

硝酸銀 六〇〇ゲレン
 蒸溜水 一〇オンス

本液十オンスに對して硝酸三、四滴添加して酸性になすべし。

二 鍍金液

其 一
 鹽化金 一ゲレン
 醋酸曹達 三〇ゲレン

水

八オンス

此鍍金液は調合後一日間は使用すべからず、本液は善く保存せられ温色调を得べし。

其 二

鹽化金 一五ゲレン
 水 四オンス

本液中に赤色リトマス試験紙を入れて青色に變ずる迄石灰水を加へたる後次液を加ふべし。

鹽化カルシウム 一二〇ゲレン
 水を加へて 七オンス

本液は十五倍量の水を以て稀釋して使用すべし。

三 鶏卵紙の保存法

感光したる鶏卵紙を乾燥せしめ、印畫紙の裏面を左液中に二分間浸漬すべし。

法處用術真寫編貳第

バレンタ氏法

第一液

硝酸銀

枸橼酸

温湯

第二液

ゼラチン

鹽化アムモニウム

水

第三液

酒石酸

重炭酸曹達

朋礬

枸橼酸

水

P, O, P,

一 ピー、オー、ピー乳劑

バーカー氏法

ゼラチン

鹽化アムモニウム

ロツセル鹽

硝酸銀

アルコール

水

一オンス

三〇オンス

一七五ゲレン

一八ゲレン

五〇ゲレン

七五ゲレン

四ドラム

五オンス

四八〇ゲレン

一二〇ゲレン

五¹/₄オンス

一四四〇ゲレン

四二ゲレン

二四オンス

四二ゲレン

二一ゲレン

二七ゲレン

本劑は華氏百度に熱し、全部溶解したる後十分時間此温度に保たしむべし。

水

五オンス

二三四

阿膠を水中に浸漬し熱を加へて溶解し之に鹽化アムモニウムを加ふ、第二液及第三液を攝氏五十度に於て混和したる後、黄色光線の下に於て第一液を加ふ、同温度に熱し善く振盪し少時間成熟せしめて濾過す、粗面印畫紙には阿膠を七五四ゲレンに減ずべし。

上法は明快なる印畫を得べきものなれ共軟調の原板用には乳劑中に重炭酸カルシウム〇、〇五乃至〇、一プロセント溶液を加ふべし、此重炭酸溶液は蒸溜水四オンスに純炭酸四八〇ゲンシ(二八瓦)を溶解し之れに白墨(炭酸カルシウム)を加へて乳白色に爲して調製す。

ビードル氏法

ネルシン阿膠

三四〇ゲレン

明礬

一五ゲレン

水

六¹/₄オンス

ロツセル鹽

一五ゲレン

鹽化アムモニウム

一一ゲレン

上液を攝氏五十度に熱し、之に左液を加ふ。

硝酸銀

一一五ゲレン

枸橼酸

六二ゲレン

水

一オンス

二 鍍金液

其 一

鹽化金

二¹/₂ゲレン

硫青酸アムモニウム

三〇ゲレン

水

二〇オンス

總べて硫青酸鍍金液は生熟せしむるを要す、本液の調合法は水の一半に鹽化金を溶解

二三五

し他の一半に硫青酸を溶解して前者を後者に注ぎ善く振盪し、冷却せしめて使用する、若し冷水を用ゐたれば混和後は十二時間放置して成熟せしむるを要す。

二三六

其二

鹽化金

一ゲレン

重炭酸曹達

二ゲレン

フホルメート曹達

八ゲレン

水

二〇オンス

本液を以て鍍金すべき印畫は豫め食鹽一割溶液に浸漬すべし。

其三

タングステート曹達

三〇ゲレン

炭酸曹達

一ゲレン

鹽化金

一ゲレン

水

一〇—二〇オンス

其四

第一液

蒸溜水

一オンス

鹽化金

一五ゲレン

第二液

鹽化ストロンチウム

一五〇ゲレン

蒸溜水

$\frac{3}{4}$ オンス

第三液

硫青酸加里

八〇—一五〇ゲレン

蒸溜水

$\frac{1}{4}$ オンス

第二液を沸騰せしめ之に華氏百五十度に熱したる第一液を加ふ、次に第三液を沸騰せしめ之れに第一液及第二液の混和液を加へて攪拌す、而して之を冷却して濾過す、若し沈澱物を生ぜば再び熱すべし。本液は十倍量に稀薄して使用すべし。

二三七

其五

鹽化金 四ゲレン
 蒸溜水 一オンス
 之れに次液の若干量を加へて沈澱物を溶解すべし。

リネカーバマイド 九〇ゲレン
 蒸溜水 一〇オンス

上液約半オンスを執り、之れに

枸櫞酸 八ゲレン
 を加ふ、之れに

蒸溜水を加へて 三五オンス

とす、而して最後に食鹽を加ふ、即ち

食鹽 一六〇ゲレン

印畫は定着の前後共に充分に水洗するを要す。

三 洗浴食鹽溶液

印畫紙の鍍金前に印畫を次の食鹽水に少時間浸漬せば不均齊の鍍金及び斑點を防ぐとを得べし。

食鹽 二オンス
 炭酸曹達 一オンス
 水 二〇オンス

白金鍍金液を以て鍍金する場合には炭酸曹達を用ふべからず。

四 ピーオーピー白金鍍金液

其一

鹽化白金加里 四ゲレン
 磷 酸(比重一、一二) 三/四オンス
 水を加へて 二〇オンス

其二

鹽化白金加里

四ゲレン

鹽化曹達

四〇ゲレン

枸橼酸

五〇ゲレン

水を加へて

二〇オンス

其三

過鹽化白金

三ゲレン

フホルメート曹達

一〇〇ゲレン

蟻酸

三〇ミニム

水を加へて

三オンス

其四 (ヴァレンタ氏黑色調印畫)

鹽化白金加里

二七一〇ゲレン

メタフェニレンチアミン

二七一〇ゲレン

水

一〇オンス

善く水洗したる印畫を本液を以て鍍金すべし。

其五 (ヴァレンタ氏赤色調印畫)

硝酸ウラニウム

一〇一〇ゲレン

チオシナミン (Thiosinamine)

九〇ゲレン

水

二〇オンス

鍍金すべき印畫は善く水洗し尙ほ醋酸を以て酸性にしたる水を以て水洗して鍍金す、
斯くて鍍金したる印畫は定着す、又た鍍金定着混合液をセビヤ調に鍍金するを得べし。

其六

枸橼酸

九〇ゲレン

食鹽

九〇ゲレン

鹽化白金加里

四一八ゲレン

鹽化金

四一八ゲレン

水

二〇オンス

本液の作用迅速ならば水を以て二倍に稀釋するを得、金の量を白金の分量に比して増加せば温色調に鍍金するを得べし。印畫は定着前に充分に水洗すべし。

五 鍍金定着混合液

其 一 (ヴァレンタ氏法)

原液

ハイポー

八オンス

硫青酸アムモニウム

一オンス

硝酸鉛

一七五ゲレン

明礬

三五〇ゲレン

水を加へて

二〇オンス

先づハイポーを水に溶解し、之れに硫青酸を加ふ、次に少量の水に溶したる明礬及び

硝酸鉛を加ふ、此混和液を十分時間華氏百二十度に熱したる後冷却せしむ、而して使用の際は

原液

一〇オンス

水

一〇オンス

鹽化金

三⁷/₁₀ゲレン

其 二

鹽化金

二ゲレン

硝酸鉛

一〇ゲレン

白堊

半オンス

ハイポー

四オンス

水

二〇オンス

混和液を善く振盪して放置す。

六 燒過ぎ印畫の減力液

甲液—硫青酸アムモニウム一割溶液

乙液—赤色血鹵鹽一割溶液

甲液五オンス、乙液半オンス、水二十四オンス

七 ピー、オー、ピー現像液

其 一

ハイドロキノロン

一六ゲレン

枸橼酸

四〇ゲレン

醋酸曹達

一オンス

水

二〇オンス

印畫を現像液中に浸漬して現像したる後十分乃至十五分間水洗し、通常の如く鍍金す

鑑 寶 眞 寫

べし。

其 二

第一液

焦性没食酸

四〇ゲレン

酒石酸

四〇ゲレン

水

二〇オンス

本液は三、四週間保存せらるべし。

第二液

重クローム酸加里

一六ゲレン

水

一六オンス

第一液及第二液等量を混合して現像す。

マグネシウム線六吋程を燒梓に密接して燃燒せば可なり。定着液は如左

ハイポ

三¹/₄オンス

法 處 用 術 眞 寫 編 貳 第

醋酸鉛

二〇〇ゲレン

二〇オンス

二

其 三

ビー、オー、ビー、印畫を五分乃至十分間臭素加里一割溶液中に浸漬したる後水洗し次液を以て現像す。

第一液

ハイドロキノン

四〇ゲレン

亞硫酸曹達

一六〇ゲレン

水を加へて

二〇オンス

第二液

臭素加里

二七オンス

炭酸曹達

二オンス

水を加へて

二〇オンス

普通の原板には第一液半オンス、第二液一オンス、水半オンスを混和して用ゐ、平調^{フラット}の原板には第一液三ドラム、第二液一オンス、水五ドラムを用ゐ、硬調の原板には第一液七ドラム、第二液一オンス、水一ドラムの混和液を使用すべし。

八 ビー、オー、ビー印畫の減力液

沃度加里

五ゲレン

ハイポー飽和溶液

一オンス

或は硝酸ウラニウム

五ゲレン

水

二オンス

コロデオン、ビー、オー、ビー

(セロイデン紙、アリスト白金紙等)

一 コロデオン、ビー、オー、ビー乳劑

第一液

鹽化ストロンチウム

一五四ゲレン

鹽化リシウム

七七ゲレン

水

五〇〇ミニム

アルコール

九三〇ミニム

第二液

硝酸銀

四〇〇ゲレン

水

五〇〇ミニム

アルコール

一〇〇〇ミニム

第三液

枸橼酸

七七ゲレン

アルコール

六七五ミニム

グリセリン

九二ゲレン

三プロセントコロデオン三百五十部を執り之れに第一液十五部を徐々に加ふ、次に暗

室内に於て第二液六十部を滴加して善く振盪す、尙ほ之に第三液五十部及びビエーテル五十部を加ふべし。

二 鍍 金 液

其 一

硼 砂

九〇ゲレン

醋酸曹達

九〇ゲレン

鹽化金

二¹/₂ゲレン

水

二〇オンス

其 二

硫青酸アムモニウム

九〇ゲレン

鹽化金

二¹/₂ゲレン

水

二〇オンス

本液は帶青黑色調に鍍金す。

三五〇

其 三

硫青酸アムモニウム

三五ゲレン

醋酸曹達

$\frac{3}{4}$ オンス

鹽化金

五ゲレン

水

二〇オンス

一時間前に調劑して使用すべし、醋酸曹達の代りに酒石酸曹達を使用するを得べし。

三 鍍白金液

其 一

ビー、オー、ビー白金鍍金液其一二三九頁は温褐色調印畫を作るに適するものなるが、次の處法も一般に用ひらるゝものなり。

枸橼酸

四五ゲレン

鹽化白金加里

四ゲレン

水

二〇オンス

其 二

乳 酸(比重一、二二)

二五ゲレン

鹽化白金加里

四ゲレン

水

二〇オンス

其 三 (黑色調)

印畫を數回水洗し左の鍍金液を以て褐色調に仕上げべし。

硼 砂

九〇ゲレン

鹽化金

二ゲレン

水

二〇オンス

本液は印畫の水洗前に作るを便利とす、印畫の陽影部現はれざるときは硼砂の量を増加し、印畫の色調鮮麗ならざるときは鹽化金を増量すべし。

二五一

鍍金したる印畫は十分時間水洗したる後鍍白金液に移すべし。
鍍白金原液は

二五二

鹽化白金加里

三〇ゲレン

磷 酸(比重一、一二)

五ドラム

水を加へて

二〇オンス

本液は六十オンス迄になすを得べし。

鍍金せる印畫は定着前に七、八回水を更へて水洗す、其内初めの四、五回は印畫面に
殘留する酸を中和せしむる爲めに重碳酸曹達少量を加へたる水を使用すべし。

其 四 (温褐色調)

印畫を温湯にて三回水洗して次液に入るべし。

アムモニヤ

一ドラム

温 湯

二〇オンス

本液中にて印畫を淡黄色に仕上げ再び三四回水洗したる後礮砂鍍金液を以て約一分間

鍍金すべし。

其 五 (赤色調)

善く水洗したる印畫を約半時間次液に入れて橙黄色調になすべし。

食 鹽

一オンス

水

二〇オンス

次に一分時間水洗したる後礮砂鍍金液中に數秒間浸漬して鍍金すべし。

其 六 (紫色調)

印畫を濃く焼附け次液を以て處望の色調に鍍金すべし。

鹽 酸

六オンス

鹽化金

一〇ゲレン

水を加へて

二〇オンス

充分に水洗したる後五プロセントのハイポー液にて定着す、上液中鹽酸少量なるときは
は帶青紫色調となり、多量なるときは堇紫色調印畫となるべし。

二五三

四 鍍金定着混合液

コロチオン印畫紙は混合鍍金液を用ふること可ならざれども、ヴァレンタ氏の處法を示せば如左

- | | |
|----------|-----------------------------------|
| 水 | 二〇オンス |
| ハイポー | 五オンス |
| 硫酸アムモニウム | 二四〇ゲレン |
| 明礬 | 七〇ゲレン |
| 枸橼酸 | 七〇ゲレン |
| 硝酸鉛 | 九〇ゲレン |
| 醋酸鉛 | 九〇ゲレン |
| 鹽化金 | 三 ¹ / ₂ ゲレン |

本液は初め混濁すれども數日後には清澄となるべし。

臭素紙及ガスライト紙

アミドル現像液

- | | |
|-------|--------|
| 亞硫酸曹達 | 六五〇ゲレン |
| 臭素加里 | 一〇ゲレン |
| 水 | 二〇オンス |
| アミドル | 五〇ゲレン |

上藥の溶解したる後アミドルを加ふ。

本液は三日間以上保存せざるべし。

アミドル現像液調製に最も便益にして經濟的なるものは亞硫酸曹達一割原液を作り、其の十オンスに臭素加里五ゲレンを加ふ、而して使用の際には原液一オンスにアミドル四ゲレンを加へ、尙ほ之を倍量に稀薄すべし。

メトール現像液

第一液

メトール

一〇〇ゲレン

亞硫酸曹達

二オンス

臭素加里

一二ゲレン

水

二〇オンス

第二液

炭酸加里

二オンス

水

二〇オンス

第一液三オンス及第二液一オンスを混和して使用する、ガスライト紙は上記の處法中水を半量にして調合したるものを以て現像すべし。

メトール、ハイドロキノロン

メトール

二ゲレン

ハイドロキノロン

三〇ゲレン

亞硫酸曹達

三/四オンス

炭酸曹達

三/四オンス

臭素加里一割溶液

二〇ミニム

水

二〇オンス

ガスライト紙は上記の水を十オンスにして調合したるものを用ふべし。

ロヂナル現像液

ロヂナル

一〇〇乃至一五〇ミニム

水

一〇オンス

臭素加里ニ割溶液

二〇ミニム

オートル現像液

第一液

オートル

一二〇ゲレン

異性重亜硫酸加里

六〇ゲレン

水

二〇オンス

第二液

亜硫酸曹達

四オンス

炭酸加里

一オンス

臭素加里

二〇ゲレン

水

二〇オンス

第一液及第二液等量を用ふべし。

鑑 寶 眞 寫

ガラスライト紙は上記處法中の水を半量に減じて調合したるものを以て現像すべし

蓚酸鐵現像液

第一液

硫酸鐵

五オンス

硫酸

三〇滴

溫湯を加へて

二〇オンスとす

第二液

中性蓚酸加里

五〇オンス

臭素加里

一〇ゲレン

溫湯を加へて

二〇オンスとす

第二液四オンスに第一液一オンスを加へて使用する。

現像後直ちに次の酸液中に印畫を浸すべし。

法 處 用 術 眞 寫 編 貳 第

酸 液

水 狀 醋 酸

水

酸の痕跡を除去する爲めに善く水洗すべし。

清 淨 液

臭素印畫の黄色汚染を除去する爲めには左の清淨液を使用すべし。

明礬飽和液

鹽 酸

一 ドラム

二〇 オンス

一〇 オンス

三 ドラム

二六〇

臭素紙鍍金調色液

其 一 (茶褐色調)

第一液

硝酸ウラニウム

水

九〇 ゲレン

二〇 オンス

第二液

赤色血鹵鹽

水

九〇 ゲレン

二〇 オンス

兩液等量を混和し其の一オンスに氷狀醋酸二十滴を加ふべし。調色液は數回水洗をなすべし、醋酸の代りに拘櫛酸(十ゲレン)又は鞣酸(五ゲレン)を用ふるを得べし

其 二 (温褐色調)

鹽化白金加里

昇 汞

拘櫛酸

水

一 二ゲレン

六ゲレン

五 四ゲレン

六 オンス

本液はガスライト紙に使用するを得ず、新鮮なる溶液を用ふれば温褐色調を得べく且

つハイライトを汚さざるものなり。

其三 (綠色調)

- 鹽化バナヂウム 二〇ゲレン
- 第二鹽化鐵 一〇ゲレン
- 第二摻酸鐵 一〇ゲレン
- 赤血鹽 二〇ゲレン
- 摻酸飽和液 二七オンス
- 水を加へて 二〇オンス

鹽化バナヂウムは鹽酸及少量の水を以て溶解し、摻酸飽和液に鹽化鐵及摻酸鐵を加へ之を水半量にて稀薄し尙ほ赤血鹽を加へて攪拌し最後にバナヂウムを加ふ、本液を以て印畫を青色調に調色し尙善く水洗して綠色調に爲すべし陽影部に於ける黄色汚染は硫青酸アムモニウム(一オンスに二ゲレン)を以て除去洗滌すべし。

其四 (青色調)

- 枸橼酸鐵アンモニア一割溶液 二オンス
- 赤血鹽一割溶液 二オンス
- 醋酸一割溶液 二〇オンス

善く水洗したる臭素印畫を本液にて鍍金す、陽影部の純白になるまで善く水洗すべし本液は印畫の畫像を補力するものなり。

其五 (朱色調)

- 第一液
 - 硫酸銅 六〇ゲレン
 - 中性枸橼酸加里 二四〇ゲレン
 - 水 二〇オンス

- 第二液
 - 赤色血滷鹽 五〇ゲレン
 - 中性枸橼酸加里 二四〇ゲレン

第貳編寫眞術用處法

水

二〇オンス

二六四

兩液等量を混和して調色すべし。

其六 (セビヤ調)

第一原液

赤色血鹵鹽

四〇〇ゲレン

臭素加里

六〇〇ゲレン

水

一〇オンス

本液一オンスを水一オンスにて稀薄すべし。

充分に定着し、水洗したる臭素印畫を本液を以て漂白すべし漂白時間は凡そ五分間に
して、漂白したる印畫は水洗を充分にしたる後次液の中に入るべし。

第二原液

硫化曹達

一オンス

水

一〇オンス

本液半オンスを水十オンスにて稀釋す。

漂白したる印畫を本液中に凡そ一分時間浸漬して鍍金調色す。
調色したる印畫は善く水洗すべし。

ガスライト紙温色調印畫法

ガスライト紙を温色調に仕上ぐるアイコノゲン現像液は左の如し。

原液

アイコノゲン

一五〇ゲレン

亞硫酸曹達(結晶)

一 $\frac{1}{2}$ オンス

炭酸加里

半オンス

水を加へて

一二オンスとす

所望の色調に應じて前記の原液を水と臭素加里一割液を加へて現像液を調製す。露出
時間は標準時間より二倍乃至十二倍を要す。温黒色調には原液一オンス、水二オンス、

二六五

ロツセル鹽

一オンス

二六八

水

二〇オンス

重クローム酸加里一プロセント液

八一〇ドラム

(其四) 黒色調

醋酸曹達

三オンス

水

二〇オンス

此の現像液を以て現像したる印畫は定着前に稀酸加里一割五分溶液中に入れざるべからず定着液は

ハイポー

一オンス

アムモニア(0.880)

一二〇ミニム

水

二〇オンス

カリタイプ感光劑

ヂエームス、トムソン氏 (James Thomson) の示せる處方及印畫法は左の如し。

純良の用紙を感光し、之を低温度の人工熱を以て乾燥し、原板に當て、焼附くれば黄褐色にして宛も白金タイプ印畫の如く淡き畫影を現出すべし、此淡き畫影は拘繰酸及稀酸を以て酸性にせる硝酸銀溶液を以て處理すれば忽然強き畫影となるべし、現像したる印畫は水洗して沈澱物を除去したる後ハイポー液を以て定着し、然る後半時間程水洗して乾燥すべし。

黒色調印畫には左の感光液を適當となす。

第一法

蒸溜水

一オンス

拘繰酸鐵アムモニヤ

三二二ゲレン

稀酸鐵

一六ゲレン

蓆酸加里	三三ゲレン
蓆酸	一〇ゲレン
鹽化銅	四ゲレン
拘緣酸	四ゲレン
硝酸銀	一〇ゲレン
アラビヤ護膜	一〇ゲレン
重クローム酸加里五分溶液	一〇滴

印畫用紙に上液少量をそゞぎ、直ちに刷毛を以て平均に塗布す、用紙が粗面なる時は清水を海綿に含まして用紙を濕はし、其乾くを待つて感光すべし。本法による印畫紙は感光力緩和なれども良好の黒色調を得らるべし用紙は硬くして滑面のものを選ぶを可とす、而して陰影部に於けるデテールを描出せんとせば、稍々弱き感光液を用ひ、二回の塗布を爲すべし、若し感光液弱はければ鐵鹽類を加へて容易に強性に爲すを得べし。

第二二法

蒸溜水	一オンス
拘緣酸鐵アムモニヤ	五〇ゲレン
第二蓆酸鐵	一三ゲレン
蓆酸加里	三五ゲレン
鹽化銅	八ゲレン
蓆酸	一六ゲレン
硝酸銀	一六ゲレン
アラビヤゴム	一〇ゲレン
重クローム酸加里五分溶液	五一一〇滴

硬調の原板には滑面の紙を用ゐ、感光液は一回塗布し、平調の原板には荒面の紙を用ゐる二回の感光塗布を爲すべし。

燒附は日光々線を以て爲し、陰影部が善く現はるゝまで燒附くるべし。

現像原液は左の如し。

蒸溜水

一オン

拘櫛酸

一〇ゲレン

硝酸銀

四〇ゲレン

磷酸曹達

一¹/₂ゲレン

現像原液一ドラム及び蓆酸一ドラムを水七ドラムに混和して使用する。

燒附したる印畫を現像液中に入れ氣泡の附着せざる様注意すべし。現像は一分時にし

て完成せらる、現像したる印畫は凡そ一分時間水洗したる後水一オンスにハイポー二

ゲレンの比にて作る清淨液即ち定着液に移すべし、定着は滑面紙には五分、粗面紙に

は十分時を要す。

平調なる原板には次の感光液を使用すれば黒色調を印畫得らるべし。

第三法

蒸溜水

一オンス

枸櫛酸鐵アマモニヤ

二八ゲレン

蓆酸鐵

二三ゲレン

蓆酸加里

三五ゲレン

鹽化銅

八ゲレン

蓆酸

一五ゲレン

硝酸銀

一九ゲレン

アラビヤ護膜

一〇ゲレン

重クローム酸加里五分溶液

五滴

半調色部に於ける好良のグラデーションを得んには左の處方を可とす。

第四法

蒸溜水

一オンス

枸櫛酸鐵アマモニヤ

一八ゲレン

蓆酸鐵

二八ゲレン

砒酸加里

三六ゲレン

二七四

鹽化銅

九ゲレン

砒酸

一六ゲレン

硝酸銀

一八ゲレン

アラビヤ護膜

一〇ゲレン

重クロム酸五分溶液

五一一〇滴

感光液が強過ぐれば稀薄すべし、而して之が爲めに畫影が淡ければ強性の現像液を用ふべし。

カリタイプ、セピヤ調印畫法

帶赤褐色調カリタイプ印畫は左の感光液を使用し、ハイポー及食鹽の稀薄液即ち水一オンスにハイポー及び食鹽各々一ゲレンを以て定着す、先づ初め左液をコーチングすべし。

枸橼酸鐵アムモニヤ

二八ゲレン

砒酸鉄

六ゲレン

砒酸加里

二二ゲレン

砒酸

五ゲレン

枸橼酸

三ゲレン

硝酸ウラニウム

一六ゲレン

硝酸銀

四ゲレン

アラビヤゴム

一〇ゲレン

蒸溜水

一オンス

此感光液を塗布したる用紙を乾燥せしめたる後再び次液を塗布して乾燥す。

硝酸銀

五〇ゲレン

枸橼酸

二五ゲレン

蒸溜水

一オンス

二七五

粗面紙には感光液を稍々稀薄にし、平調フラットの原板には重クローム酸加里五分溶液數滴を加ふるを得焼附は直接日光線を以て爲すべし。

二七六

没食子酸鐵印畫法

一名インキ法と稱へ白地に黒く印畫するものにして製圖の複製に用ゆ。

感光液

第一液

水

鹽化鐵

第二液

水

酒石酸

五〇立方仙米

一二瓦

五〇立方仙米

三瓦

現像液

水
没食子酸
稀酸

一リートル

三瓦

〇、一瓦

カーボン印畫法

カーボンチツシユ感光液

重クローム酸加里
水
アムモニヤ(0.830)

一オンス

二〇—三〇オンス

六〇ミニム

弱き感光液に永く浸漬せるものは強き感光液に少時間浸したるものと同一の効果あり
感光したるチツシユをスクイーヂするに其輕重によりて感光液を左右するものなり。
左の感光液はコントラストの少き薄き原板に適當す。

重クローム酸加里

一オンス

二七七

水

枸橼酸

五〇オンス

1/4オンス

之にアムモニアを少量添加して淡黄色となす、本液にて感光したるチツシユは前記感光液を用ゐたるチツシユよりも永く保存せらるべし、然れども感光力弱くしてカーボン印畫法に適する力強き原板には適當せざるものなり。

護謨印畫感光液

左記の感光液はアレキササンダー、ヒル氏(Alex. W. Hill)の示せる處法にして良好の印畫を得らるべしと云ふ。

護謨印畫用紙は魚膠グルユの五倍溶液を刷毛を以て塗布す。護謨溶液は純良のアラビヤ護謨一オンスを水二オンスに溶解せしめて調製す。

感光液は左の如し

重クローム酸アムモニヤ

1/2オンス

硫化マンガン Manganese Sulphate

1/4オンス

硼酸

五〇ゲレン

水

三オンス

塗布すべき混和液は左の如くにして調製す。

護謨溶液

二ドラム

感光溶液

二ドラム

ピヂテールブル、ブラック(繪具)

六ゲレン

バート、アムバー(繪具)

一ゲレン

本液は刷毛を以て下引せる用紙に塗布するものなり。

白金タイプ印畫セピア調色液

第一液

摻酸加里

四オンス

蒸溜水

一六オンス

二八〇

第二液

鹽化銅

一二四ゲレン

蒸溜水

八オンス

第三液

鹽化水銀

一オンス

蒸溜水

一六オンス

第四液

醋酸鉛

三二ゲレン

蒸溜水

四オンス

第一液十二部と第二液四部とを混和し、之れに第三液四部及び第四液一部とを混和すべし、本液中の沈澱物を溶解せしむる爲めに熱すべし、尙ほ攝氏八十度に熱して通常の通り現像し通常の鹽酸清淨液に入れ尙ほ強アムモニア一部、水百二十八部の混和

溶液中に五分時間浸漬したる後水洗して乾燥すべし。

白金タイプ感光劑

ジャーマン氏 (A.J. Jarman) はアロールトを以て下引して之を次液を以て感光せり

感光溶液

第一液

枸橼酸鐵アムモニヤ

三五〇ゲレン

蒸溜水

五オンス

第二液

鹽化白金加里

二二五ケレン

蒸溜水

五オンス

第三液

稀酸飽和溶液

第四液

硝酸鉛

三〇〇ゲレン

蒸溜水

五オンス

第五液

鹽化加里

六〇ゲレン

蒸溜水

五オンス

第六液

第一液

一オンス

第五液

二ドラム

第一液一オンス、第六液二ドラム、第二液一オンス、第四液一ドラム、第三液四滴を混和す、此混和液に濃厚のアラビヤ護謨溶液數滴を添加す、ワットマン紙には二回^{コチング}塗布す。

現像液は稀酸加里六オンス半、熱湯四十五オンス、磷酸曹達一オンス半、稀酸四分の

一オンスを用ふ、現像液は冷却して用ゐ、鹽酸五十倍溶液を以て定着すべし。

オゾブローム印畫

(臭素印畫よりカーボン印畫を得る法)

臭素印^画は畫左の定着液を以て定着すべし。

ハイポー

一二オンス

異性重亞硫酸加里

一オンス

クローム明礬

一オンス

水

八〇オンス

若し普通の定着液を以て定着せば臭素印畫をフォルマリン又はクローム明礬を以て硬むべし。

フォルマリン

一部

水

一〇部

又は

クロロム明礬

四プロ溶液

感光溶液

オゾブローム溶液(販賣品)

四オンス

水

一六オンス

オゾブローム溶液即ち感光液を稀薄せば印畫に於けるコントラストを増し、又た強き感光液を用ゆれば軟調印畫を得べし。

尙ほ印畫に深さ及びコントラストを増さんとするには感光液二十オンスに次の枸櫞酸溶液二十ミニムを添加して用ゆるべし。

硼酸

六〇ゲレン

枸櫞酸加里

六〇ゲレン

水

五オンス

又た軟調の印畫を作るには感光液二十オンスに對して次の明礬液六十乃至七十ミニム

を添加すべし。

明礬

一二〇ゲル

鹽酸

一ドラム

水

五オンス

プラタイプ紙印畫法

マット、アルビュミン、ペーパー一名プラタイプ紙は近來獨逸で流行してをる焼附印畫紙で此印畫紙は白金タイプ印畫に酷似してをつて、一寸區別するにも難つかしい程である、此プラタイプは鍍金の加減で紫黒調にも、帯褐黒色にも又た帯青黒色調にも仕上ぐる事が出来、畫調に深みと強みがあつて特種の雅味を有して居る、人像印畫などには圓味ラウンドネットが善く附いて半調部が順序善く現出せらるゝから、陽影部と陰影部の調和を善く調ふることが出来て人像印畫には最も適當して居る。

焼附は日光々線で成畫よりも略三倍程の濃さに焼込むのであるから焼度を檢するに白

金タイプ紙よりも餘程容易すいのである。

原紙の種類には種々ありて中荒、大荒などがわり厚手、薄手があり、又た日本紙の局紙の様なものがあるから原畫に適應するものを選定せば趣味ある印畫を作ることが出来る、白金タイプ印畫と同様に此印畫紙は營業的の寫真に適當するは勿論藝術的寫真畫にも特に適應して頗る價值ある印畫を製作することが出来やうと思ふ。

此プラタイプ印畫は白金タイプ印畫と同様に仕上げ後修整することが出来て甚だよい六櫻社製のプラタイプ紙は既に感光してあるから普通の鶏卵紙の様に感光するに及ばず、只焼付けて鍍金定着すれば宜敷いので乾燥せる場處に貯へて置けば長時間保存することが出来るのである、鍍金液は左の如くにして調製する、即ち

寫 眞 寶 鑑

鍍金液

水

醋酸曹達

炭酸曹達

二〇オンス

二二ゲレン

四七ゲレン

鹽化金

一ゲレン

鹽化金は使用前三十分間に加へ、溶液の溫度は華氏六十五度位にすべきである。

燒附けたる印畫は此鍍金液中に半分乃自五分間浸漬する、次いで善く水洗したる後に次の白金溶液で仕上ぐるのである。

白金溶液

水

鹽化白金加里

磷酸液(比重一、二二〇)

三〇オンス

一五ゲレン

半オンス

此白金溶液で褐色又は黒色調に鍍金するので、黒色調に鍍金するには陽影部が純白になる迄白金溶液中に浸漬する水洗の間に鍍金が進行するから多數の印畫を鍍金する場合には鍍金を少しく速や目にする必要がある、鍍金した印畫は流水中で二三回水洗した後定着する、白金液は新鮮なるものが宜いのであるから白金液は度々使用せざるが宜しい、白金溶液のみで鍍金しても鮮美なる黒色調に仕上ぐる事が出来るの

第 貳 編 寫 眞 術 用 處 法

である。

定着に次亜硫酸曹達一割溶液を使用するので凡そ十分間程浸漬しバットを能く振盪して充分に定着したる後流水中で數回水洗するのである。

鍍金液は左の溶液を使用しても宜敷い、

鍍金液

水

タングステート曹達

硼砂

鹽化金

二〇オンス

三グレン

四五グレン

一グレン

第一の鍍金液でも第二の鍍金液を使用しても宜敷いが通常は第一の醋酸曹達鍍金液を吾々は使用して居る、本印畫にワニスを施せば光澤印畫を得らるゝから或る場合には採用すると興味があるであらう、

寫 眞 寶 鑑

ウラノタイプ紙

一 感光液

木炭紙、ワットマン、又は白金タイプ原紙等にゼラチンの下引を爲し、之に左の感光溶液を塗布す。

硝酸ウラニウム

氷狀酸

水

二〇瓦

數滴

四オンス

二 現像液

赤褐色調印畫

赤色血鹵鹽

水

五瓦

二オンス

第 貳 編 寫 眞 術 用 處 法

紫色調印畫

鹽化金

二分の一瓦

水

二オンス

帶黒褐色調

硝酸銀

一〇瓦

水

二オンス

鹽素紙現像液

亞硫酸曹達

六〇瓦

水

一二〇〇珪

炭酸曹達

六三瓦

メトール

一、八瓦

ハイドロキノン

七、八瓦

藍寫眞感光液

第一液

枸橼酸鐵アンモニヤ

一〇瓦

水

四〇立方仙米

第二液

赤血鹽

八瓦

水

四〇立方仙米

兩液等量を混和し、刷毛を以て用紙に塗布して乾燥せしむ、

オイルプリント感光液

其一

重クローム酸アンモニア

一〇〇ゲレン

炭酸曹達

一〇ゲレン

二九二

上液一部と純アルコール又は九十プロセント、アルコールの二部とを混合して使用するべし。

四オンス

其 二

重クロム酸アンモニア六プロセント溶液

一部

アルコール

二部

上液を刷毛にてオイルプリント印畫紙又はカーボン複轉寫紙に塗布す。

第參編 各製造會社製品用法

英國 イルホルド會社

イルホルド乾板

一、沒食曹達現像液

甲原液

水

五¹/₂オンス

硝酸

二〇ミニム

焦性沒食酸

一オンス

本液は數週間保存するを得べし。

乙原液

水

五¹/₂オンス

異性重亞硫酸曹達

七〇ゲレン

焦性没食酸

本液は數週間保存に耐ふべし。

一オンス

第一液

甲原液又は乙原液

一—二オンス

水を加へて

二〇オンス

第二液

結晶炭酸曹達

二オンス

亞硫酸曹達

二オンス

臭素加里

二〇ゲレン

水を加へて

二〇オンス

第一液及第二液等量を混和して使用すべし

二、没食メトール現像液

第一液

没食原液(甲又は乙)

二オンス

水を加へて

二〇オンス

第二液

メトール

九〇ゲレン

異性重亞硫酸加里

二〇ゲレン

臭素加里

四五ゲレン

水を加へて

二〇オンス

第三液

結晶重炭酸曹達

二オンス

結晶亞硫酸曹達

二オンス

臭素加里

二〇ゲレン

水を加へて

二〇オンス

第一液一部、第二液一部、第三液二部を混和す、

第一液

三、メトール、ハイドロキノン現像液

メトール

六〇ゲレン

ハイドロキノン

九〇ゲレン

異性重亜硫酸加里

九〇ゲレン

水を加へて

二〇オンス

第二液

結晶炭酸曹達

二オンス

結晶亜硫酸曹達

二オンス

臭素加里

二〇ゲレン

水を加へて

二〇オンス

イルホルド、アモート乾板現像液

炭酸曹達

一¹/₂オンス

水

¹/₂パイント

手札判には上液一オンス、二枚掛判には一オンス半、カビネ判には二オンスを用ふべし。

イルホルド製版用乾板

一、線條乾板現像液

第一液

メトール

三〇ゲレン

ハイドロキノン

一五〇ゲレン

亜硫酸曹達

三¹/₂オンス

水

三〇オンス

第二液

炭酸加里

六オンス

臭素加里

九〇ゲレン

水

三〇オンス

二九八

兩液等量を混和したる液中に約一分間浸漬し、且つ枸橼酸曹達の稀薄液に入れて現像す。

現像したる原板は酸性ハイポー液を以て定着し、迅速に乾燥すべし。

二、スクリーン乾板現像法

第一液

メトール

四〇ケレン

ハイドロキノン

五〇ゲレン

臭素加里

三〇ゲレン

亞硫酸曹達

八〇ゲレン

水

二〇オンス

第二液

苛性加里

一〇〇ゲレン

水

二〇オンス

兩液等量を混和して用ゐ、ハイポー液(水一パイントにハイポー八オンス)にて定着す。減力はフアーマー氏法を用ゐ、補力はモンクホーヴン氏法を用ふべし。

三色製版用色素液

甲原液

ピナバドール

一グラム

アルコール

一〇〇〇立方センチメートル

色素液は左の如くにして調製す

甲原液

四部

アムモニア

二部

蒸溜水

二〇〇部

本液中に乾板を三分時間浸漬すべし。

イルホルド、ピー、オー、ピー

第一回水洗

數回更へて十分間水洗すべし。

硬膜液

明礬

一 $\frac{1}{2}$ オンス

食鹽

一オンス

水

二〇オンス

印書を本液中に五分乃至十分時間浸漬すべし。

第二回水洗

數回更へて十分間水洗すべし

調色液

第一液

硫青酸アムモニウム

一〇〇ゲレン

水

一〇オンス

第二液

亞硫酸曹達

一〇ゲレン

水

一〇オンス

本液は使用前一日に調合すべし

第三液

鹽化金

一五ゲレン

水

一五オンス

鍍金液は第一液及び第三液各二オンスを執り、之に水を加へて二十オンスと爲して調製す。

温調色に仕上ぐるには鍍金前に上液中に第二液を一オンス半乃至二オンス加ふべし
第三回水洗

數回更へて印畫を五分間水洗すべし。

定着

ハイポー三オンスを水二十オンスにて溶解したる溶液中に十分間浸漬して定着すべし。

イルホルド、カロナ印畫紙

イルホルド、ビー、オー、ビーと同一の濃さに焼附くべし。焼附印畫は水洗せずして直ちに次液中に浸漬す。

粉狀明礬

一¹/₂オンス

硫酸アムモニウム

二〇ゲレン

水

二〇オンス

本液中に印畫を五分間浸漬して鍍金す、次に印畫を流水中に十分時間浸漬したる後次のハイポー液中に十分間入れて定着す。

ハイポー

三オンス

水

二〇オンス

最後の水洗はイルホルド、ビー、オー、ビーの如く二時間行ふべし。次の二原液を作り置きして鍍金するは甚だ便利なり。

第一液

粉狀明礬

八オンス

水

一〇〇オンス

第二液

硫酸アムモニア

一〇〇ゲレン

水

一〇オンス

第一液十八オンスと第二液二オンスとを混和して使用すべし。熱帯地方にては次の如き調合法を以てするを可とす。

硫酸アムモニア

二〇ゲレン

クローム明礬
水

二〇ゲレン
二〇オンス

其他の處理は前述のものと同様にすべし。

第四回水洗

最終の水洗は流水中に二時間以上浸漬して行ふべし。

イルホルド臭素紙及オパール

一、メトール、ハイドロキノン現像液

第一液

メトール

五〇ゲレン

ハイドロキノン

二五ゲレン

亜硫酸曹達

一オンス

水を加へて

二〇オンス

第二液

結晶炭酸曹達

一七オンス

臭素加里

三〇ゲレン

水を加へて

二〇オンス

第一液及第二液等量を混和して使用す。

二、鐵現像液

次液を作り冷却して使用すべし。

第一液

硫酸鐵

二七オンス

硫酸

一五滴

温湯を加へて

一〇オンス

第二液

中性蓚酸加里

一〇オンス

臭素加里

二〇ゲレン

温湯を加へて

四〇オンス

三〇*

第二液四オンスに第一液一オンスを加へて使用すべし。

三、清淨液

水

八〇オンス

氷狀醋酸

半オンス

水を數回更へて十分時間水洗すべし

四、定着液

水

二〇オンス

次亞硫酸曹達

三オンス

本液中に十五分間浸漬して定着す、定着後は流水中に二時間以上浸漬して水洗す。

イルホルド、ガスライト紙

一、メトール、ハイドロキノン現像液

メトール

五ゲレン

亞硫酸曹達

半オンス

ハイドロキノン

二〇ゲレン

炭酸曹達

半オンス

臭素加里一割溶液

一〇ミニム

水

一〇オンス

二、アミドル現像液

本液はイルホルド臭素紙及ガスライト紙に使用せらるゝものなり。

アミドル

二〇ゲレン

亞硫酸曹達

半オンス

水

一〇オンス

臭素加里

適量

臭素紙には現像液一オンス中に臭素加里一割溶液四滴を、ガスライト紙には一オンス中に二滴を添加すべし。

イルホルド、プラトナ白金紙

一、現像液

磷酸加里

二オンス

水

半オンス

水

一四オンス

本液は倍量に稀薄して使用すべきものなり。

若し磷酸加里なきときは磷酸曹達を代用となすことを得れとも前者の方がなり、薬品は温湯にて溶解し冷却して使用すべし。

二、定着液

純鹽酸

一オンス

水

八〇オンス

印畫を五分間上液中に浸漬して定着したる後、十五分間水洗して清浄すべし。

イルホルド幻燈乾板

第一液

一、メトール、ハイドロキノン現像液

メトール

五〇ゲレン

ハイドロキノン

二五ゲレン

亞硫酸曹達

一オンス

水を入れて

二〇オンス

第二液

炭酸曹達

一オンス

臭素加里

三〇ゲレン

水を入れて

二〇オンス

第一液及第二液等量を用ふ。

二、ハイドロキノン現像液

第一液

ハイドロキノロン

一六〇ゲレン

亞硫酸曹達

二オンス

水を加へて

二〇オンス

第二液

苛性曹達

八〇オンス

亞硫酸曹達

三〇ゲレン

水を加へて

二〇オンス

第一液一部、第二液二部及び水二部を以て調製す。

英國 マリオン會社

マリオン乾板

第一液

其一 沒食曹達現像液

焦性沒食酸

一オンス

亞硫酸曹達

八オンス

硫酸

六〇ミニト

水を加へて

二〇オンス

第二液

炭酸曹達

八オンス

臭素加里

六〇ゲレン

水を加へて

二〇オンス

第一液五オンスを水二十オンスにて溶解し、第二液五オンスを水二十オンスにて溶解し、兩液等量を混和して現像す。軟調の原板を望む場合又は最瞬時の原板には臭素加里を省略するを得。

其二、沒食アムモニア現像液

第一液

焦性沒食酸

一オンス

臭素アムモニウム
枸橼酸

一オンス

水を加へて

六〇ゲレン

一〇オンス

第二液

強アムモニア (880)

一 $\frac{1}{2}$ オンス

水を加へて

一〇オンス

第一液及第二液各々別々に其二オンスを水二十オンスにて稀薄し、各液等量を混和して使用する。

其三、メトール、ハイドロキノン現像液

第一液

メトール

五〇ゲレン

ハイドロキノン

五〇ゲレン

亞硫酸曹達

七〇〇ゲレン

臭素加里

五ゲレン

水を加へて

二〇オンス

第二液

炭酸加里

二オンス

水を加へて

二〇オンス

兩液等量を混和して使用する。

マリオナ、ピー、オー、ピー

一、粗面及光澤紙鍍金液

第一液

鹽化金溶液

(水一オンスに一ゲレン)

第二液

硫酸アムモニウム溶液

(水一オンスに十ゲレン)

第一液及第二液各々一オンス、水八乃至十二オンスを混和して使用する。

二、光澤紙鍍金液

甲液

鹽化金溶液

(水一オンスに一ゲレン)

三一四

乙液

炭酸曹達

三〇ゲレン

水

一五オンス

第一液二オンス半、第二液二オンス半を執り之に水を加へて二十オンス乃至三十オンスと爲す。

三、粗面紙白金調色液

第一液

鹽化白金加里

一五ゲレン

水

一五オンス

鹽酸

五ミニム

第二液

枸橼酸

三〇〇ゲレン

鹽化曹達

三〇〇ゲレン

水

一五オンス

第一液一オンス第二液一オンスを執り之に水を加へて三十オンスと爲す。

マリオン、コロデオ、ビー、オー、ピー

其一、温黒色調色液

鹽化白金加里

一五ゲレン

磷酸(比重一、一二〇)

二七ドラム

水

三五オンス

本液中に二分乃至六分間印畫を浸漬して處望の色調に鍍金す、調色後直ちに水洗して定着すべし。

其二、帶青黒色調色液

鹽化金

二ゲレン

硼砂

八〇ゲレン

三一五

水

二時間前に調製して使用する。

印畫を本液中に浸して紫色調となしたる後、前掲の白金溶液中に移し温黒色調に鍍金すべし。調色後は水を數回更へて半時間水洗して定着すべし。

其三、セビヤ調色液

印畫を温湯にて數回洗滌す、其内最後の三回はアムモニア一プロセント液を加へたる水を用ふ、印畫が淡黄を呈せば五六回水洗したる後白金調色液を以て調色すべし。斯くて通常の如く水洗して定着す。

其四、紫色調色液

濃く焼附け、善く水洗して次液の中に入るべし。

鹽化金(一プロセント液)

一オンス

鹽酸

三オンス

水

一〇オンス

鹽酸少量なれば青色調となり多量なれば紫色調となるべし、處望の色調に鍍金したる

後水洗及び定着すること通常の如し。

マリオン臭素紙

アミドル現像液

アミドル

四〇ゲレン

亞硫酸曹達

四〇〇ゲレン

臭素加里

五ゲレン

水を加へて

二〇オンス

マリオン、ガスライト紙

其一、アミドル現像液

亞硫酸曹達

二〇〇ゲレン

アミドル

二〇ゲレン

臭素加里一割溶液

一〇滴

水

一〇オンス

三一八

其二、寒色調アデユロル現像液

アデユロル

二〇ゲレン

炭酸曹達

二〇〇ゲレン

亞硫酸曹達

二〇〇ゲレン

臭素加里

五ゲレン

水を加へて

一〇オンス

普通の原紙にては一フートの距離にて一時のマグネシウム線を燃焼して露出時間となす。

現像時間は一分間となす。

其三、温色調アデユロル現像液

アデユロル

二〇ゲレン

炭酸曹達

二〇〇ゲレン

亞硫酸曹達

二〇〇ゲレン

臭素加里

二五ゲレン

水を加へて

二〇オンス

普通原板に與ふる露出時間は一フートの距離に於いてマグネシウム線六吋を燃焼せば可なり。現像時間は四分間。

印畫の陽影部が純白とならざる場合には臭素加里一割溶液數滴を現像中に添加すべし。

マリオン、エス、デー印畫紙

本印畫紙は單現像紙と稱するものにして焼附は六吋の距離に於いて普通の瓦斯燈光を以て約三十秒間露出すべし。現像液は簡單なるものにして結晶炭酸曹達二オンスを一ポイントの水を以て溶解したるものを使用す。畫影は十五秒乃至三十秒間にして現出す現像したる印畫は善く水洗し酸性定着液中加入すべし。

マリオン、幻燈乾板

ハイドロキノン	一五ゲレン
メトール	五ゲレン
亞硫酸曹達	二〇〇ゲレン
臭素加里	二ゲレン
苛性曹達	二〇ゲレン
水を加へて	一〇オンス

米國 スタンダード會社

スタンダード乾板

スタンダード乾板には「イムペリアル、ポルトレート」、「スタンダード、エキストラ」、「オルソノン」、「オルソクロマチック」の四種類あり、第一種は人像用にして特に寫真

場の撮影に適して居るもので、陽影部より陰影部に至るまで微紋を善く描出するものである、第二種は第一種のもの、如くに速度迅速でなきが故に、非常に瞬速を要せざる人物撮影に最も好適せるものである、第三種オルソノンは二重布乾板で整色にしてハレーションの防止が爲してあるものである、それでスクリンを使用すれば殊更に宜しいが、スクリンを用ひなくとも効果がある、黄色及帶綠黄色に鋭く感ずるから暗室内の硝子には注意して必ず濃厚の紅色のものを用ひねばならぬ、然らざれば乾板にカブリを生ぜしむる。第四種「オルソクロマチック」はシングル、コーチングの整色乾板で室内撮影、家具の撮影、複寫等に適應せるものである、黄色及綠色には善く、感光して他の色光との關係を克く調へるものであるから、風景撮影には甚だ宜しきものである。

左に指定の現像液を擧げん、

一、没食曹達現像液

第一液

水

三二オンス

稀酸

二〇ゲレン

没食酸

一オンス

第二液

結晶炭酸曹達

四オンス

水

一六オンス

第三液

亞硫酸曹達

三オンス

水

一六オンス

第一液は先づ稀酸を水に溶かしたる後、没食酸を加へてつくるべし。
上液は左の割合に調合して使用する。

第一液

二オンス

第二液

一オンス

第三液

水

一オンス

「オルソノン」乾板を現像するには左の割合に調合したるものを使用す。

第一液

六オンス

第二液

二オンス

第三液

一オンス

水

一二オンス

二、メトール、ハイドロ現像液

水

一六オンス

亞硫酸曹達

一オンス

メトール

三〇ゲレン

ハイドロキノ

六〇ゲレン

臭素加里

一〇ゲレン

結晶炭酸曹達

一オンス

使用の際は前液一部を水三部に混和して現像す、露出過度の乾板を現像するには次の
ハイドロキノン現像液を推奨す。

三、ハイドロキノン現像液

第一液

水

一六オンス

亞硫酸曹達

二オンス

ハイドロキノン

一六〇ゲレン

第二液

水

一六オンス

炭酸曹達

四オンス

臭素加里

八〇ゲレン

前兩液は其等量を混和して使用す。

定着液の最も簡單にして良好なるものは次亞硫酸曹達一部を水四部に溶解したるものである。

尙次の定着液は乾板膜を硬むるの效驗を有する。

第一液

水

一二八オンス

次亞硫酸曹達

四八オンス

亞硫酸曹達

四オンス

第二液

水

三二オンス

粉狀明礬

三オンス

枸橼酸

半オンス

使用の際は第一液四オンスに第二液一オンスを混和して用ふべし。

結晶炭酸曹達

一オンス

三二四

使用の際は前液一部を水三部に混和して現像す、露出過度の乾板を現像するには次の
ハイドロキノン現像液を推奨す。

三、ハイドロキノン現像液

第一液

水

一六オンス

亞硫酸曹達

二オンス

ハイドロキノン

一六〇ゲレン

第二液

水

一六オンス

炭酸曹達

四オンス

臭素加里

八〇ゲレン

前兩液は其等量を混和して使用す。

鑑 寶 眞 寫

法用品製 社會造製各編參第

定着液の最も簡單にして良好なるものは次亞硫酸曹達一部を水四部に溶解したるものである。

尙次の定着液は乾板膜を硬むるの效驗を有する。

第一液

水

一二八オンス

次亞硫酸曹達

四八オンス

亞硫酸曹達

四オンス

第二液

水

三二二オンス

粉狀明礬

三オンス

枸橼酸

半オンス

使用の際は第一液四オンスに第二液一オンスを混和して用ふべし。

三二五

米國 クラマー會社

クラマー乾板

沒食酸現像液

第一液

水

稀酸

焦性沒食酸

第二液

水

無水亞硫酸曹達

第三液

水

一六オンス

一二ゲレン

一オンス

一六オンス

二オンス

一六オンス

一六オンス

炭酸曹達

一オンス

使用の際は上液を左の如く混和すべし

第一液

一オンス

第二液

一オンス

第三液

一オンス

水

一〇オンス

エチノル現像液

第一液

水

無水亞硫酸曹達

三〇オンス

二オンス

亞硫酸アセトン

1/4オンス

エチノル

一オンス

第二液

使用の際は

水
炭酸加里

三〇オンス
四オンス

第一液

一オンス

第二液

一オンス

水

六一一〇オンス

此現像液は數回使用することを得られ且つ善く保存せらるゝものなり。

以上はクラマー會社指定現像液なれども次に掲ぐる諸種の現像液も良好なるものとす

オートル現像液

原液

水

六〇オンス

オートル

三〇〇ゲレン

臭素加里

二〇ゲレン

使用の際は左の如く混和すべし

無水亞酸曹達

三オンス

無水炭酸曹達

一 $\frac{1}{2}$ オンス

原液

一部

水

冬期 一乃至二部

夏期 二乃至四部

パイロカタキン現像液

第一液

水

三二二オンス

無水亞硫酸曹達

二オンス

パイロカタキン

一オンス

第二液

水

三二二オンス

苛性曹達

1/2 オンス

使用の際は左の如く混和すべし

第一液

一 オンス

第二液

一 オンス

水

二 オンス

メトール、ハイドロキノン現像液

第一液

水

一五 オンス

メトール

一八〇 グレン

ハイドロキノン

三〇 グレン

無水亞硫酸曹達

一 オンス

第二液

水

一五 オンス

炭酸加里

1/4 オンス

使用に方りては左の如く混和すべし

第一液

一 オンス

第二液

一 オンス

水

六 オンス

抑製劑としては臭素加里溶液(臭素加里一、水十の割合)一滴を現像液一オンス中に添加すべし。

アイコノゲン現像液

第一液

温湯

六〇 オンス

アイコノゲン

一 オンス

無水亞硫酸曹達

二 オンス

第二液

鑑 寶 眞 寫

水
無水炭酸曹達
使用の際に方りて

第一液
第二液

現像液一オンスに臭素加里一割溶液一滴を添加すべし。

寫度不足なる場合には第一液三オンス第二液半オンスを混和して使用すべし。

パイロ、メトール現像液

第一液
水
メトール
枸橼酸
焦性没食酸

六〇オンス
二オンス
三オンス
一オンス
三〇オンス
一オンス
四〇ゲレン
一/二オンス

法用品製 社會造製各 編 參 第

臭素加里
無水亞硫酸曹達

第二液
水
無水亞硫酸曹達

第三液
水
無水炭酸曹達

使用の際は
第一液
第二液
第三液
水

二〇ゲレン
一/四オンス
三〇オンス
四オンス
三〇オンス
四オンス
一/二オンス
一/二オンス
一/二オンス
一〇乃至二〇オンス

第一液

酸性定着液

水

一二八オンス

次亜硫酸曹達

三二二オンス

第二液

水

三二二オンス

無水亜硫酸曹達

三オンス

硫酸

7/16オンス

クロロム明禁

二オンス

第一液に第二液を注ぎ善く攪拌しつゝ混和すべし寒冷なる季節には第二液を半量に減ずべし。

第二液は次の如く調製するを得べし。

水

三二二オンス

異性重亜硫酸曹達

三オンス

クロロム明禁

二オンス

本液は數回使用すと雖原板を染むることなく且つ原板を温湯にて洗滌することを得る程度までに原板膜を硬むることを得べし。

普通定着液

水

三二二オンス

次亜硫酸曹達

八オンス

本液は常に清淨なるものを用ゆべし。

原板減力液

第一、露出過度又は現像過度の爲めに密度が強過ぎたる原板を減力するには

第一液

水

一六オンス

次亞硫酸曹達
第二液

一オンス

三三六

水

一六オンス

赤血鹽

一オンス

第二液は黒色紙にて包みたる瓶中に入れ暗黒の室内に貯藏すべし。
使用の際は兩液を左の如く混和すべし

第一液

八オンス

第二液

一オンス

弱き光線の下にて減力を施すべし。

原板は定着後直ちに減力液の中に入る、を得べく、又た原板が乾燥せるものは半時間清水中に浸漬したる後減力すべし、減力後は水洗を充分にすべし。

第二、硬き光線の爲め又は露出不足の原板を永く現像したる爲めに硬調になりたる原板に於ける陰影部のデテールを現出するには左の減力液を使用すべし

第一液

水

一六オンス

過硫酸アムモニウム

1/4オンス

硫酸

五滴

本液は約一週間保存するを得べし

第二液

水

一六オンス

無水亞硫酸曹達

一オンス

第一液及び第二液を混和して使用すべし

原板はハイポの痕跡を充分に驅除すべし。

原板補力液

第一液

水 一六オンス
 第二鹽化水銀 一二〇ゲレン
 臭素加里 一二〇ゲレン

第二液

水 八オンス
 無水亞硫酸曹達 一オンス

原板を第一液にて漂白したる後第二液に浸漬すべし、充分なる補力を得ざる場合には善く水洗したる後繰廻し補方法を施すべし、補力の度が過ぎて密度が強過ぎる場合にはハイポ一オンスを水十六オンスに溶解したる液中に數分間浸して減力するを得べし。

タンク現像液

没食タンク現像液

第一液

水 一六オンス
 枸橼酸 二〇ゲレン
 無水亞硫酸曹達 1/4オンス
 焦性没食酸 一オンス

第二液

水 一六オンス
 無水亞硫酸曹達 二オンス

第三液

水 一六オンス
 無水炭酸曹達 二オンス

左の割合により上液を混和して使用すべし

第一液 一オンス

使用の際は次の如き割合に混和すべし。

第一液

一オンス

第二液

一オンス

水(華氏五十度)

二四オンス

ロヂナル、タンク現像液

水(華氏五十度)

一〇〇オンス

ロヂナル

一オンス

英國 ウェリントン會社

ウェリントン乾板

其一 沒食アムモニア現像液

第一液

焦性沒食酸

一オンス

第二液

一オンス

第三液

一オンス

水(華氏五十度)

五〇オンス

エヂノル、タンク現像液

第一液

水

三二オンス

無水亞硫酸曹達

二オンス

亞硫酸アセトン

1/2オンス

エヂノル

1/2オンス

臭素加里

五ゲレン

第二液

水

三二オンス

炭酸加里

四オンス

鑑 寶 眞 寫

亞硫酸曹達

二オンス

三四二

枸橼酸

四〇ゲレン

水を加へて

一〇オンス

第二液

アムモニア

一オンス

水を加へて

一〇オンス

第三液

臭素アムモニウム

一オンス

水を加へて

一〇オンス

第一液十ミニム、第二液十ミニム及第三液五ミニムを執り之に水一オンスを加へて稀薄すべし。

其二、没食曹達現像液

第一液

焦性没食酸

一オンス

亞硫酸曹達

二オンス

枸橼酸

四〇ゲレン

水を加へて

一〇オンス

第二液

炭酸曹達

八オンス

亞硫酸曹達

八オンス

水を加へて

八〇オンス

第二液一オンスと第一液一ドラムとを混和し之を水一オンスにて稀釋して現像す。

寫場撮影の原板は第二液一オンスと第一液半ドラムとを執り、水一オンスを加へて稀釋して使用する。

法用品製社會造製各編參第

ウエリントン、ロール、フキルム

上記の没食曹達現像液を用ふ、即ち第一液一ドラム、第二液一オンス、水一オンスを使用す。

露出過度の原板には現像液四オンスに對して次の臭素加里液十滴乃至二十滴添加すべし。

臭素加里

一オンス

水

一〇オンス

此抑製劑は露出過度の場合にのみ用ふるものとす。

ウエリントン、ピー、オー、ビー

其一、蟻酸鍍金液

蟻酸曹達

一五ゲレン

重炭酸曹達

三ゲレン

鹽化金

二ゲレン

蒸溜水

四〇オンス

本液は調劑後直ちに使用することを得。

其二、磷酸鍍金液

磷酸曹達

六〇ゲレン

鹽化金

二ゲレン

水

四〇オンス

本液は一時間前に調合して用ゆるものとす。

上記の液量はカビネ印畫廿四枚を鍍金するを得べし。

ウエリントン、スペシアル、ピー、オー、ビー

鍍金前に充分善く水洗すべし。

硫青酸アムモニウム

二〇ゲレン

三四六

鹽化金

二ゲレン

水

一六オンス

ウエリントン臭素紙

臭素紙の現像に適する現像液なれば如何なるものにも適應すれども、本紙に最も適するものは左のアミドル現像液なり

第一 アミドル現像液

アミドル

五〇ゲレン

亞硫酸曹達

六五〇ゲレン

臭素加里

一〇ゲレン

水

二〇オンス

此現像液は三日間内に使用すべきものとす。

本液は亞硫酸曹達原液を作り置き使用の都度アミドルを之に加ふるを可とす。單液にして善く保存するものは次のメトール、ハイドロキノン現像液なり。

第二 メトール、ハイドロキノン現像液

メトール

五〇ゲレン

ハイドロキノン

一五ゲレン

亞硫酸曹達

五〇〇ゲレン

臭素加里

一〇ゲレン

炭酸加里

一〇〇ゲレン

水

二〇オンス

初めメトールを水に溶解したる後他の藥品を加ふべし。現像液中に臭素加里を多量に加ふるときは印畫は平調フラットとなり且つ褐色又は綠色調を帶ふるに至るべし。

定 着 液

ウエリントン臭素紙の定着は左の酸性定着液を使用すべし。

亞硫酸曹達

一封

硫酸又は醋酸

二オンス

水

八〇オンス

ハイボー四オンスを水一ポイントに溶解したる液に上液一オンスを加ふべし、臭素印畫は本液を以て五分間にして充分に定着せらるべし。

臭素紙セピヤ調色液

第一原液

赤色血滲鹽

四〇〇ゲレン

臭素加里

六〇〇ゲレン

水

一〇オンス

原液一オンスを水十オンスに加ふべし。

上液中に五分間入れて漂白したる臭素印畫を清水に浸したる後次液の中に入るべし。

第二原液

硫化曹達

一オンス

水

一〇オンス

本液半オンスを水十オンスに加ふべし。

臭素印畫の畫影は直ちに硫化銀に變じてセピヤ調となるべし、調色したる印畫は流水を以て十五分間水洗すべし。

臭素紙清淨液

臭素紙印畫に黄色の汚染を生ずるか又は少しく被翳カブリを蒙ることあるが、之を清淨するには左液を用ゆるを可とす。

チオカーバマイド 二〇ゲレン
枸橼酸 一〇ゲレン
水 一〇オンス

本液は臭素紙印畫に於けるハイポールの痕跡を除去するにあらざれば效用をなさず。

ウエリントン、エス、シー、ビー

現像液

メトール 一〇ゲレン
ハイドロキノン 三〇ゲレン
結晶亞硫酸曹達 三五〇ゲレン
結晶炭酸曹達 三五〇ゲレン
臭素加里 三ゲレン
水 一〇オンス

上記の順序に溶解して調合すべし
帶青黒色調印畫の現像液は如左

亞硫酸曹達 五〇〇ゲレン
アミドル 五〇ゲレン
臭素加里 二ゲレン
水 一〇オンス

本液は三日間内に使用せざるべからず。

ウエリントン 幻燈乾板

其 一 冷調現像液

ハイドロキノン 八〇ゲレン
亞硫酸曹達 一オンス
苛性加里 八〇ゲレン

臭素アムモニウム
水

一〇グレン
二〇オンス

三五二

其二 温黒色調現像液

ウエリントン乾板用現像液(三四一頁)三液を作り、其第一液三十ミニム、第二液六十ミニム、及び第三液三十ミニム、水一オンスを以てす。

温黒色調印畫には現像時間を二分とす。
温調を得るには第三液を九十ミニム迄に増加して露出時間を四五倍になすべし。現像時間は五六分とす。

ウオータルー乾板

英國ウエリントン會社にて自働現像の作用をなす新乾板「ウオータルー」を製造販賣せり此乾板は現像液を要せず只清水のみを以て現像するものなり、同乾板は他の自働乾板の如くに感光劑に現像薬を含ましめず、乾板の裏面即ち硝子面に現像薬を塗布した

るものなれば、現像の際清水中に乾板を浸漬すれば、自然に現像せらるるものにして、良好なる原板を得らるゝといふ、其種類には迅速度、整色、迅速度、景色用等ありて乾板裏面に現像薬をパッキングしあるが故に、ハレトション防けの作用ありて甚だ便益なるものなりと云ふ。

佛國 リユミエール會社

リユミエール乾板

現像液(其一)

第一液

焦性没食酸
亞硫酸曹達

一オンス
三オンス

硝酸
水

二〇ミニム
一五オンス

三五三

第二液

炭酸曹達

四オンス

亞硫酸曹達

三オンス

水

一五オンス

第一液一ドラム、第二液一ドラム半、水一オンスを用ふ。

現像液 (其二)

無水亞硫酸曹達

四〇ゲレン

チアノル(チアミドヘノル)

二五〇ゲレン

水

二〇オンス

亞硫酸曹達の溶液中に使用の都度チアノルを加へて調合す。

オートクローム乾板處理藥液

第一現像液

A

アルコール

一〇〇立方糎

三ヲオンス

焦性沒食酸

三瓦

四五ゲレン

臭素加里

三瓦

四五ゲレン

B

アンモニア(〇、九二) 一五立方糎

ヲオンス

蒸溜水

八五立方糎

三オンス

反轉藥液

過マンガン酸加里

二瓦

三〇ゲレン

C

硫酸 一〇立方糎

三ドラム

蒸溜水

一〇〇〇立方糎

三五オンス

第二現像液

無水亞硫酸曹達

一五瓦

ヲオンス

D

チアミドヘノル 五瓦

七五ゲレン

蒸溜水

一〇〇〇立方糎

三五オンス

水を加へて

二〇オンス

炭酸曹達

四オンス

水を加へて

二〇オンス

第一液及第二液等量を混和して使用する

現像液 (其二)

第一液

メトール

四〇ゲレン

ハイドロキノ

五〇ゲレン

亞硫酸曹達

一二〇ゲレン

臭素加里

一五ゲレン

水を加へて

二〇オンス

第二液

苛性加里

一八〇ゲレン

水を加へて

二〇オンス

第一液及第二液等量を混和して使用する。

現像液 (其三)

原液

焦性没食酸

一オンス

臭素加里

六〇ゲレン

異性重亞硫酸加里

五〇ゲレン

水を加へて

一二オンス

第一液

原液

三オンス

水

二〇オンス

第二液

亞硫酸曹達
炭酸曹達

二オンス

二オンス

二〇オンス

第一液及第二液等量を混和して使用する。

現像液 (其四)

第一液

ハイドロキノン

一五〇ゲレン

異性重亞硫酸加里

一〇ゲレン

臭素加里

五〇ゲレン

水を加へて

二〇オンス

第二液

亞硫酸曹達

二オンス

苛性曹達

一〇〇ゲレン

水を加へて

二〇オンス

兩液等量を混和して使用する。

現像液 (其五)

メトール

五〇ゲレン

ハイドロキノン

四〇ゲレン

亞硫酸曹達

五〇〇ゲレン

臭素加里

二五ゲレン

炭酸曹達

五〇〇ゲレン

水を加へて

二〇オンス

イムペリアル、ピー、オー、ピー

鹽化金原液

鹽化金

一五ゲレン

水を加へて

一五ドラム

三六二

第一液

硫青酸アムモニウム

六〇ゲレン

水を加へて

二〇オンス

第二液

鹽化金原液

五ドラム

水を加へて

二〇オンス

第一液及第二液等量を混和して使用する。

第一液を第二液中に徐々に加て攪拌すべし。

イムペリアル自動鍍金ピー、オー、ピー

普通のピー、オー、ピーの如くに焼付け、水洗せずして直ちに次の鍍金液中に浸漬すべし。

硫青酸アムモニウム

二〇ゲレン

粉狀明礬

一¹/₂オンス

水

二〇オンス

本液の温度は華氏六十度を越ゆるべからず。

イムペリアル臭素紙及ガスライト紙

第一液

メトール

五〇ゲレン

ハイドロキノン

四〇ゲレン

亞硫酸曹達

五〇〇ゲレン

水

二〇オンス

第二液

臭素加里

二五ゲレン

炭酸曹達

五〇〇ゲレン

三六三

水

二〇オンス

第一液及第二液等量を混和して現像すべし。

獨逸 アニリン會社

アグファ、イゾラー乾板

ロヂナル現像液

適度に露出せる原板は左液を用ふ。

ロヂナル

一部

水

二〇部

露出過度の場合には

ロヂナル

一部

水

一〇—二〇部

之に臭素加里一割溶液を添加すべし。

露出不足の場合には

ロヂナル

一部

水

二〇—四〇部

ロヂナル、アイコノゲン、メトール、パイロの如きアルカリ現像液を以て現像するときには清潔なる原板を得れども、稀酸鐵又はアミドル現像液を用ふるときは原板膜が赤色に汚染せらるゝことあり、此の場合には原板を定着水洗したる後炭酸曹達一割溶液中に七分間浸漬し、之を水洗したる後再び十分間酸性定着液の中に入るべし、斯くて水洗すること通常の如し。

原板を補力又は減力して再び赤色汚染を生ずる場合には炭酸曹達一割溶液中に七分時間浸漬したる後、汚染の除かるゝまで水洗を充分にすべし。

アグファ、クロモ乾板

メトール、ハイドロキノン現像液

水

メトール

ハイドロキノン

亞硫酸曹達

炭酸加里

臭素加里

鮮美なるグラデーシオンを興ふるには、ロヂナル現像液を用ふるを可とす、ロヂナルは二十倍に稀薄したるものを用ふべし。

現像後充分に水洗し酸性定着液を以て水洗すべし。

ボシナーヴ、イヅラー乾板

(幻燈畫及透明陽畫用)

透明陽畫用として本乾板はハレーシオンを生ずることなく、色調の鮮美にして調子好

き畫影を得べし。

透明陽畫の現像に適する現像液ならば如何なるものにも、可なれども最も適するものは左の現像液なり。

ロヂナル

一部

水

三〇乃至四〇部

定着は酸性定着液を使用すべし。

定着したる畫板が幾分か色を有するが故に、定着後畫板を炭酸曹達一割溶液中に五分時間浸漬すべし。

炭酸曹達溶液の中に入る、ときは色付くと雖、善く水洗したる後酸性定着液に浸し、尙は充分に水洗し乾燥すれば善く清浄せらるべし。

アグフアー補力液

アグフアー補力液は單法を以て處理せらるべく、昇汞補力液を使用する場合の如く、

アムモニア又は亞硫酸曹達を以て黒く戻すが如き煩雜なくして、本液を以て直ちに所望の濃さに補力することを得べし、又たアグフアー補力液はウラニウム補力法の如く赤褐色の汚點を原板に生ぜしむることなし。

アグフアー補力液を使用するには、本液一部を水十部を以て稀薄す、補力すべき原板を補力液中に浸漬して所望の濃さに達せしむべし。

補力液強度にして畫影が過度に補力せられたる場合には、善く水洗したる後微弱なる現像液を以て現像すべし。

補力したる原板は充分に水洗したる後乾燥すべし補力したる原板を次亞硫酸曹達一プロセント溶液中に浸せば、補力液の痕跡を全く除去するを得べし。

アグフアー減力劑

アグフアー減力劑はアグフアー補力液と同じく其使用法簡易にして最も效力あり。使用の際は本劑一部を水十部に溶解すべし。

ボザムレー博士は本劑に對して左の如く述べられたり。

アグフアー減力劑は鐵鹽及チオ亞硫酸アルカリの混和物より製せるものにして、粉劑として硝子瓶中に填められ、一瓶中に約五瓦量あり之を五十立方センチメートル（ $\frac{1}{2}$ オンス）に溶解して使用することを得べし。

本液を以て普通の原板、幻燈畫板及び透明陽畫等を満足に減力することを得べく、尙又た臭素紙印畫も減力することを得。

本劑を調製するには蒸溜水又は軟水を使用せざるべからず、之れ硬水にては褐色の沈澱物を生ずるが故なり、硬水を以て調製したる減力液を以て處理して黄褐色の斑點を有する原板を得たるときは、稀薄なる明礬液に少量の磷酸を加へたる液中に原板を浸

漬して汚點を去除すべし。

アグフアー瞬速定着劑

本劑を氷に溶解すれば酸性定着液となり、通常の定着液よりも效益あるものなり、通常の定着液を以て原板を定着する時間の半ばを以て定着することを得らるゝを以て一般に高評を博し、特に迅速に定着する必要ある場合、旅行中或は酷暑の節に使用して最も效益あり。
本劑は五倍の水にて稀釋して使用すべし。

アグフアー酸性定着劑

本劑は八倍の水を以て溶解して使用す、水に善く溶解し、其作用迅速なり。
第一號は二百立方センチ(七オンス)の溶液となし。
第二號は千立方センチ(三十オンス)の溶液となし。

硝子管のものは二千立方センチ(七十オンス)の溶液となして使用すべし。

米國 シード會社

シード乾板

一、沒食現像液

第一液

水

一〇オンス

結晶亞硫酸曹達

半オンス

純醋酸を加へて青色リトマス紙を稍々赤色に變ぜしめ、之れに沒食酸を加ふ。

焦性沒食酸

一オンス

第二液

水

一六オンス

結晶亞硫酸曹達

四オンス

第三液

水

結晶炭酸曹達

一六オンス

四オンス

現像の際には

第一液

半オンス

第二液

一オンス

第三液

一オンス

水

八オンス

二重布乾板ダブルコートドプレートの現像には水十八オンスを用ゆべし。

二、アイコノゲン、ハイドロキノン現像液

第一液

蒸溜水

三二オンス

結晶亞硫酸曹達

四オンス

アイコノゲン

二四〇ゲレン

ハイドロキノン

六〇ゲレン

第二液

水

三二オンス

炭酸加里

四オンス

現像の際には左の如く調劑すべし。

第一液

二オンス

第二液

一オンス

水

一オンス

二重引乾板ダブルコートドプレートには水五オンスを用ゆべし。

三、ハイドロキノン現像液

第一液

ハイドロキノン

一オンス

結晶亞硫酸曹達

五オンス

臭素加里

一〇ゲレン

蒸溜水

五五オンス

第一液

苛性加里

一八〇ゲレン

水

一〇オンス

使用の際には第一液四オンス、第二液半オンスを混和すべし。

四、メトール現像液

第一液

水

八オンス

メトール

一〇〇ゲレン

結晶亞硫酸曹達

一オンス

第二液

水

一〇オンス

炭酸加里

一オンス

第一液及第二液等量を混和し、六倍の水にて稀薄して用ふべし。コントラストに富む原板を作るには兩液等量を混和し之を三倍の水にて稀薄し、之に臭素加里一割溶液五滴を添加すべし。

五、メトール、ハイドロ現像液

本現像液は黒色調の透明陽晝及び幻燈板を作るに適す。

第一液

水

一六オンス

メトール

三〇ゲレン

ハイドロキノ

三〇ゲレン

無水亞硫酸曹達

一二ゲレン

第二液

水

臭素加里

無水炭酸曹達

一六オンス

二五グレン

一二〇グレン

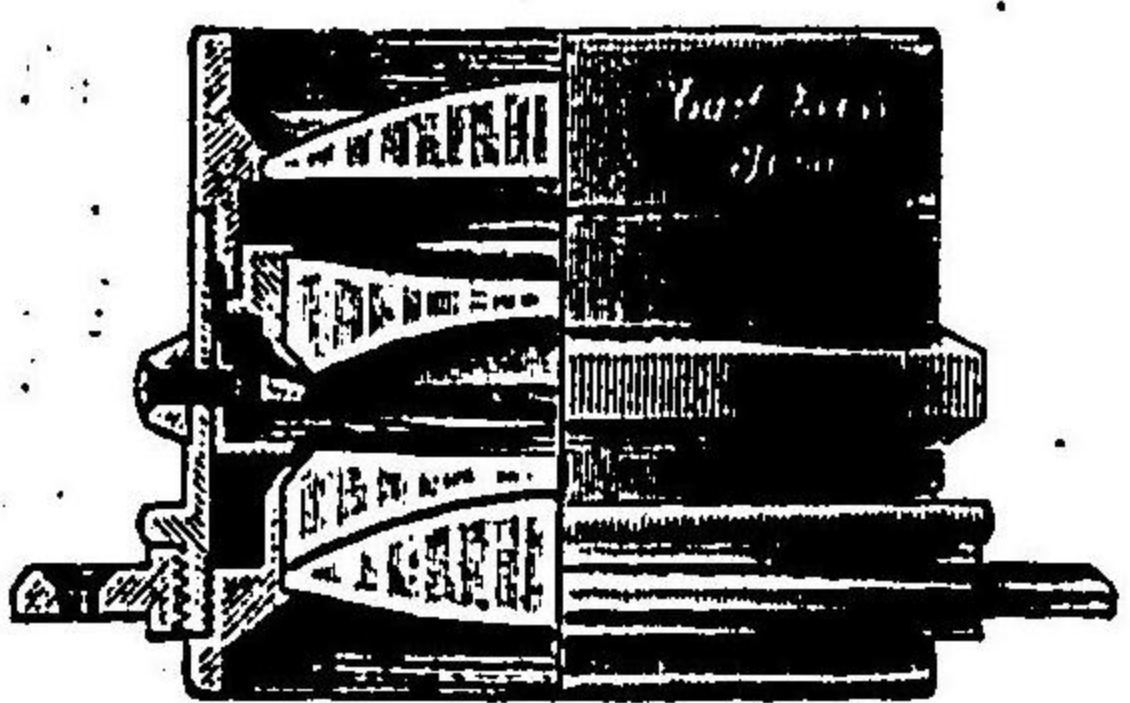
三七六

兩液の等量を混和して使用す、現像液の温度は冬期には華氏七十五度夏期には華氏七十度を保たしむべし。亞硫酸曹達及炭酸曹達は結晶の場合には倍量を使用すべし。

第四編 最新寫眞要品

C一類 テッサー鏡玉 1:3.5—1:4.5

(獨逸エナ市、カール、ツフェイス會社製)



本鏡玉はB二類テッサー鏡玉に改善を施したる最新の鏡玉にして、特に瞬間撮影用に適應せるものなり。本鏡玉の描寫力は鮮銳にして寫度頗る神速なれば、瞬間撮影は固より、人物、風景、活動寫眞の撮影、圖寫複寫に最も好適す色收差、コマ、アスチグマチズム等の缺點は精確に匡正せられあるを以て、三色版、オートクローム寫眞撮影に好適す。

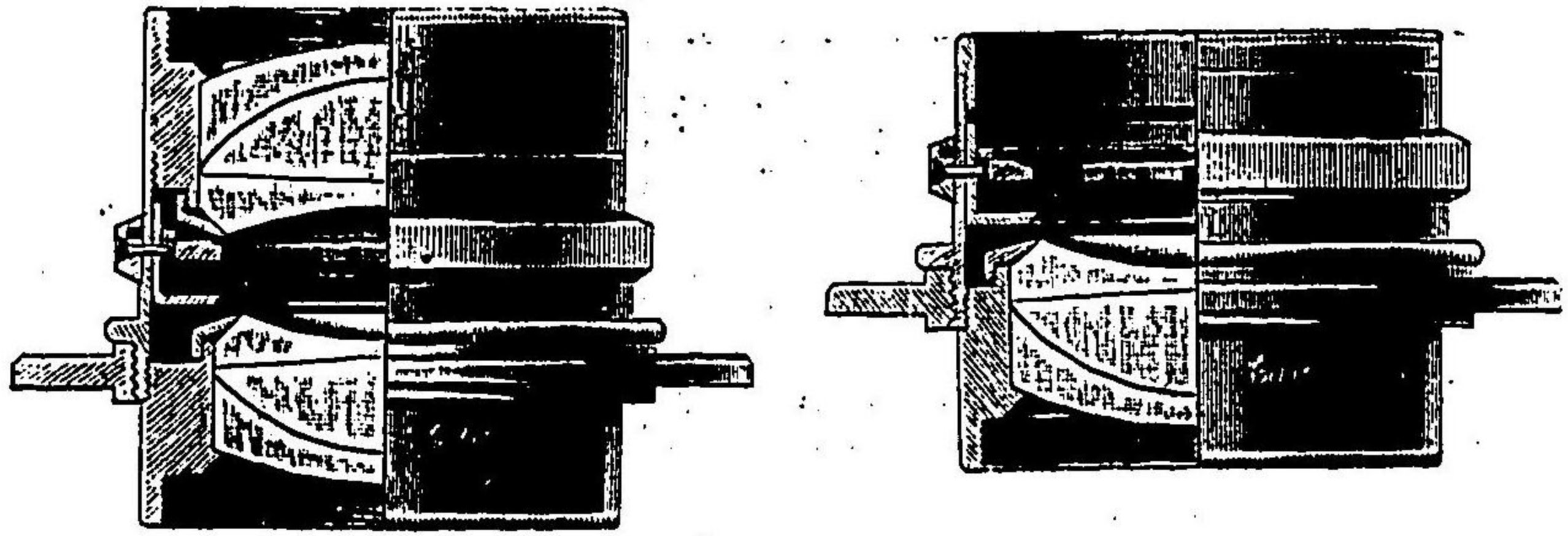
本鏡玉は1/3.5と1/4.5との二種に區別せらるゝが、前者は活動寫眞及人像撮影に適し、後者は人像及び瞬時撮影に適當す。今用途によりて之に適する鏡玉を類別列記すれば左の如し。

- 活動寫眞撮影……………一番、A二番
- 瞬間撮影……………十三番、十五番
- 人像撮影……………六番、十六番、七番、十七番、八番、十八番、十九番、二十番
- 集合撮影……………十六番、十七番、十八番、十九番、二十番。

第四類 プロクター新鏡玉 1:12.5

(獨逸カールツァイス會社製)

第四類プロクター單鏡玉は景色、人物、集合等の戶外瞬間撮影に最も好適す。室内の人物、肖像等の撮影には迅速人像專用鏡玉に比して稍長き露出を要すると雖、頗る優秀なる畫影を描出す。プロクター鏡玉には焦點距離等しきもの或は等しからざるものも共に同一の鏡胴に裝し得られて、ダブルプロクター鏡玉を形成す、ダブルプロクター鏡玉は室の内外を問はず光線状態の如何に拘らず肖像、人物、複寫、集合、建築物、景色等萬般の撮影に賞用せらる。プロクター鏡玉を單玉にて用ゆる時は畫像周縁に近き部分の



プロクター單鏡玉

直線は彎曲して描出さるれどダブルプロクター鏡玉にありては其角度廣きに拘らず彎曲描寫は毫も現るゝことなし。プロクター單鏡玉に於ては此缺點は鏡玉を非常なる廣角度に使用することにより初めて現はるゝものにして狹角度に於て使用するとき譬へば二・八インチ焦點距離の單鏡玉にて五吋七吋乾板に撮影する位ならば建築物の如き被寫體にても彎曲描寫の現はるゝこと殆んど全く之あるなし。

プロクター複鏡玉

焦點距離を異にし關係的口径 $f/16.5$ のプロクター單鏡玉二個以上を一揃としてプロクター組合鏡玉として販賣す單鏡玉はシングル、アナスタグマツトにして組合せたるときは迅速アナスタグマチック鏡玉となる。同一種のプロクター單鏡玉二個を組合せたる複^{ダブル}プロクターは關係的口径は $f/16.3$ となり。異種のプロクター單鏡玉二個を組合せるとき

品要眞寫新最編四第

番	號	同等焦點距離	最大關係的口径	中像の大小	代價
第一類	一番	八七	$f/6.3$	二叶	百〇七圓
二番	二番	九六	$f/7$	三叶	百拾七圓
三番	三番	一〇八	$f/6.3$	四叶	百拾九圓
四番	四番	一一八	$f/7$	四叶	百拾九圓
五番	五番	一三〇	$f/6.3$	五叶	百拾九圓
六番	六番	一三六	$f/7$	五叶	百拾九圓
七番	七番	一四三	$f/6.3$	六叶	百拾九圓
八番	八番	一五七	$f/7$	七叶	百拾九圓
九番	九番	一七三	$f/6.3$	七叶	百拾九圓
十番	十番	一八六	$f/7$	八叶	百拾九圓
十一番	十一番	二〇二	$f/6.3$	八叶	百拾九圓
十二番	十二番	二一三	$f/7$	九叶	百拾九圓
十三番	十三番	二二九	$f/6.3$	九叶	百拾九圓
十四番	十四番	二四七	$f/7$	十叶	百拾九圓
十五番	十五番	二六七	$f/6.3$	十叶	百拾九圓
十六番	十六番	二八九	$f/7$	十一叶	百拾九圓
十七番	十七番	三一六	$f/6.3$	十一叶	百拾九圓

三八一

鏡寶眞寫

は口径はこれよりも稍小にし、ダブルプロターとして用ふるときは焦點距離大なる方のプロター單鏡玉を鏡胴の前方に装し又單鏡玉として用ふるときは必ず鏡玉を虹彩紋の後方に装すべし。

第四類 プロター鏡玉 $f/12.5$

番	號	同等焦點距離	鏡玉口径	畫像の大小	代價
第一類	一番	一五〇	〇.五五	三叶	六拾貳圓
二番	二番	一九〇	〇.七一	四叶	六拾七圓
三番	三番	二三〇	〇.八七	五叶	七拾九圓
四番	四番	二五〇	〇.九六	五叶	八拾四圓
五番	五番	三〇〇	一.一六	六叶	八拾四圓
六番	六番	三五〇	一.三四	八叶	九拾貳圓
七番	七番	四三〇	一.六九	一〇叶	百拾四圓
八番	八番	五〇〇	一.八九	一〇叶	百拾五圓
九番	九番	六〇〇	二.二四	一三叶	百拾五圓
十番	十番	七〇〇	二.五六	一五叶	百拾五圓

第四類 ダブル、プロター鏡玉 $f/6.3-7$

三八〇

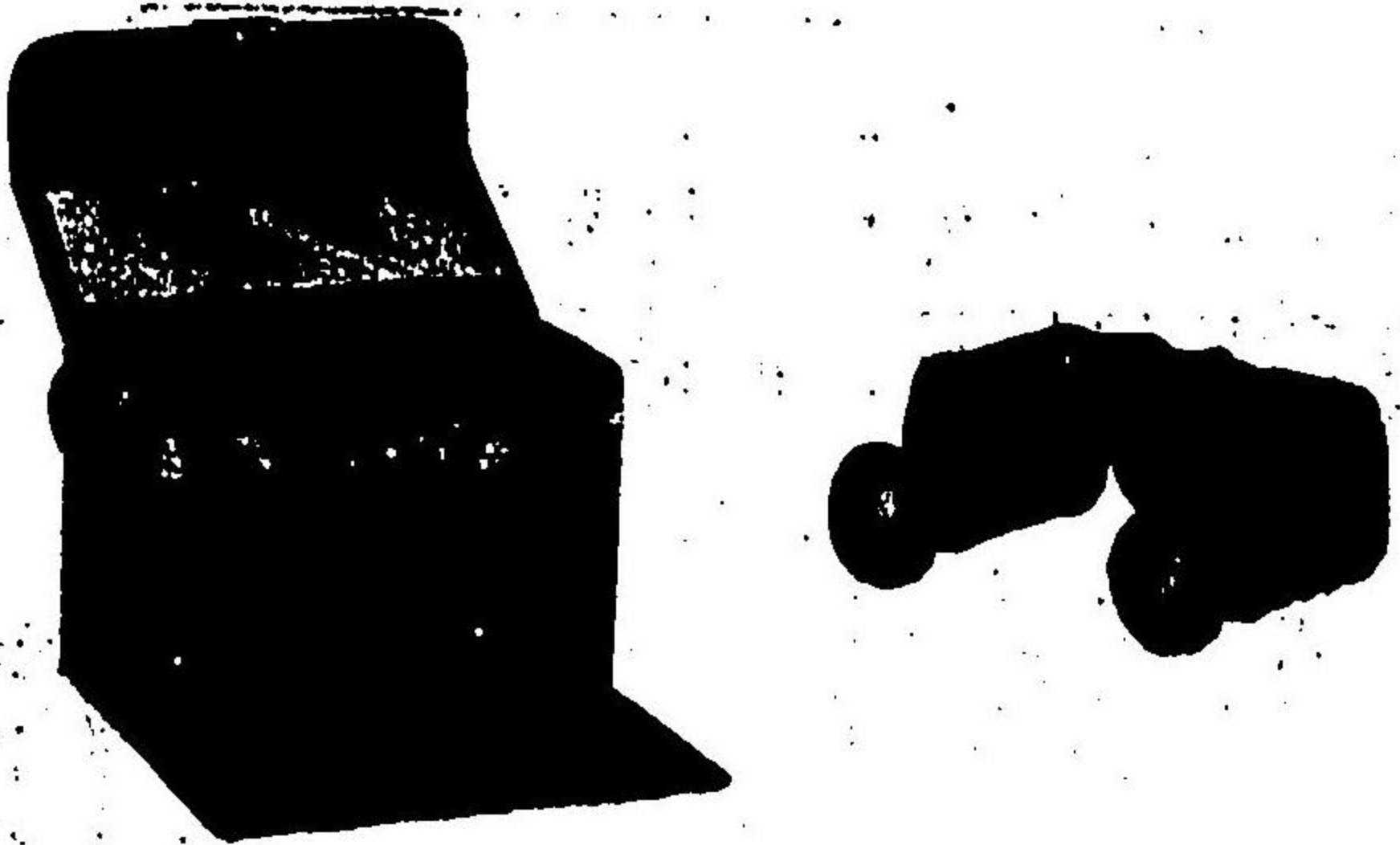
九番。九番	三四九	一三・七	1/6.3	八 ¹ / ₁₀ × 一〇	二二	× 一六	四百九拾六圓
十番。九番	三七五	一四・八	1/7	一〇 × 一二	二四	× 一八	五百七拾參圓
十番。十番	四〇七	一六	1/6.3	一〇 × 一三	一六	× 二〇	六百參拾八圓

上記の價格は最近小西本店に於て販賣する定價なり

テレエーター(劇場用雙眼鏡)

(獨逸エナ市、カール、ツァイス會社製)

テレエーターは劇場用雙眼鏡にして野外用プリズム式雙眼鏡の秀點を悉く具備し、精妙なる描寫力と、廣大なる視積とを有す。體積極めて小に、重量亦頗る軽く、三倍の廓大力を有し、二十ヤードを距つる舞臺を五ヤードに、百ヤードの距離ある物體は二十三ヤードに接近して一視界内に收め現す。故に背景たる畫割は實に克く背景としての作用を爲し舞臺に一段の美觀を添ふ。テレエーターは主として觀劇



用なれど凡て近距離の展望には好適しパノラマ、活動寫眞等の觀覽には頗る妙なり。中央に存ずる蝶番を屈伸して眼の間隔に應じて兩鏡玉の距離を伸縮調節し又齒輪機を廻轉して焦點を合はする装置あり。鏡胴は鈍金鈍銀の鍍金にして黒革或は鱈魚革を以て蔽はれ體裁善美を盡す是に附屬する囊、ケースは色革鱈魚革等を以て製し内部に鏡と小ポケットを有す。好劇家必須の絶品なり。

- a 印 鏡胴黒革張、揉革製囊入 六拾五圓
- b 印 鏡胴黒革張、着色革製ケース入 六拾五圓
- c 印 銀鍍金鏡胴鱈魚革張、鱈魚革製ケース入 七拾圓
- d 印 金鍍金鏡胴鱈魚革張、鱈魚革製ケース入 七拾圓

ペラント(單眼實體鏡)

(獨逸エナ市カール、ツァイス會社製)

ペラントはグルストランド氏の提供によりカール、ツァイス社が一九〇三年に始て製